

ではこれを掘出すことが不充分であつた。これは勿論一つは勞力の問題と、それから機械、設備の問題である。設備といふことは資本の問題になるわけであるが、これは外國から出來合ひ品が來なくなつたといふことであれば、日本で作らなければならぬ。現在では工作機械とか資金とかいふやうなもの、つまり從來の意味の資本が日本には非常に缺けてゐる。しかし資本といふものが急に出來るものではない、明治以來今日まで日本國民の蓄積し得た資本額といふものは實は甚だ貧弱なもので、これだけをもつてしては支那戰爭さへも充分に賄へない。況んや今後の眞の國防國家建設にはどうしても不足である。勞力、技術及び原材料の問題が解決されたとしても、資本の點で日本は非常に苦しまなければならぬと云はれる。目前の最大の問題はそこにある。

4 資本は新たに創造せよ

資本は元來自分が持たなければ人から借りるといふことになるのであるが、その

貸す人がなければ、どうしても自分で作り出さなければならぬ。併しそれは急速には出來ない。急に出來ないと云つて、現在の日本は、國民の努力の結晶が自然に増すのを待つといふことでは間に合はない、何處をどうしても捻出しなければならぬ。どうしてそれをつくるかといふことである。

恰度同じ問題にドイツも當面したわけである。ドイツも勞働力が有り技術があつた。しかし資本は非常に不足してをつた。しかもドイツにも金を貸すものがないので、やはりこれを自分で急速につくり出さなければならなかつた。それで何うしてあの歴大な軍備を僅かの間につくつたかといふことは我々の非常な參考になるのである。ドイツの工業力といふものは優秀であつた。そこでドイツはその現にもつて居る工業力即ち勞力と技術といふものを第一に充分に動員しようとした。これを動員するにはどうしてもお金が要る、そのお金がドイツにはなかつた。過去に蓄積した資本がないからして、新しく貨幣資本をつくらなければならぬ。そこでドイツは勞働力といふものを引當てにお金を出した、充分なお金を出したのである。五、

六年の間に一千億マーク近くのお金を出してゐる。従來の金本位、金融資本的の見解からすれば、そんなことは何處をどうしても出來ない筈なのである。自分は曾て或るドイツの大官に、君達は金（ゴールド）がなくて何うしてこんな軍備が出來たのかと尋ねたことがある。彼は「金がないからこそ出來たのだ」と答へた。

ドイツは斯くして見事にその問題を解決した。労働本位の金を出した。つまり當時は七千萬の國民であつたがその國民全部を働かすためのお金をつくり出したのである。代用貨幣といふものを廣く用ゐた。大體日本に於ても同じことをやる外はないと思ふ。

5 將來の富を代表する貨幣

つまり従來の觀念では貨幣といふものは一言にして云へば過去に蓄積された富を代表するものだからして、實際にそれだけ富がないのに金を無茶苦茶に出すわけに行かぬ、強ひて出せば第一物價が騰る。所謂インフレーションになる。かう言はれ

てをるのである。今日低物價政策といふものが日本では嚴に實施されてゐる、まあ従來の觀念に従へば、インフレーションを抑へるためには飽まで低物價といふ事にならう。それはなるほど何等統制をせず金を出せば、物に比べてお金が多くなる、従つて物價が騰るのは當然である。しかし今日既に日本でも消費の統制は可なり嚴重に行はれてをるし、價格も公定されてをるから、これを更に適正に、嚴重に勵行し、その他色々必要な手當てさへすれば、いくらお金が出てインフレーションといふことにはならないわけである。之に反し、物がだんだん不足すればいくら通貨を制限してもインフレは免れないわけだ。

現在ドイツでは毎日一億マークからのお金を戦費に使つてをる、毎日毎日一億マークからの戦費を出してをるのであるから、随分民間に行き渡る。

ところがお盆がいくら這入つても物が買へない。みんな切符制度であるから、天下の富豪でも、一個の労働者でも一箇月にパンをいくら肉を何斤喰べる、着物をいくら着る、何がいくら買へるといふことに制限されてゐるから、お金がはいつても、

これを使ふことが出来ない。勢ひこれは銀行に預ける外ない。政府はそのお金をまた使ふ。少しの利息さへ拂へばいい。それが自動的に繰返へされてゐるわけである。だからさして公債を募らんでも一日に一億の金を出してゆける。そして勿論物價は少しも上らない。日本で何故それが出来ないかといふことである。ドイツは労働を引當てに金を出した。日本でも無論國民の勞働力と云ふものが結局ものを言ふのである。その上日本の場合には國家に對する國民の信頼と云ふものが絶大であつて、今日日本國民で國家の將來について疑ひをもつものは一人もない筈である。ドイツは歐羅巴の眞中に位して、ヴェルサイユ條約で手枷足枷をかけられ、おまけに四面楚歌、國內も非常な不況に沈淪してゐた。そのどん底から立上つたのが即ち今のドイツである。オーストリア生れの伍長さんが出て天下をとつたのであるから、國民は初めは充分に信頼してゐなかつたと見なければならぬのである。それにも拘らず、ああいふ政策を強行し、その出すところの代用貨幣、これを何人も疑はずして用ひた。日本は萬邦無比の國體を誇る國柄で、その環境もヨーロッパの中央に於ける當

時のドイツに比較すると餘程有利である。

既に日滿支のプロックといふものも出来つつあり、更に南方の世界有數の富源を有する廣い領域が今後大東亞共榮圈として日本人の活動の天地とならんとしてゐる。日本の場合は國民の勞力を基礎としたお金と云はなくてもいい。從來の金、即ち金融資本と云ふものが過去の富を代表するならば、日本の場合、何故將來の富を代表する貨幣を有ち得ないのか。或は云ふであらう、物が無いのに貨幣ばかり出しても駄目だと。從來の考へ方を脱却し得ない人達はかう言ふに違ひない。しかし觀念上、流通貨幣といふもの或は交換の媒介としての貨幣と、富を代表する貨幣といふものを區別をつけて考へる必要があるのではあるまいか。今政府が將來の富を引當てにお金を出すとすれば、この金は單に流通の具としてでなくそれ自身現實の價値を有するものと見てなせいか、之れを從來の金（ゴールド）と違はないものと見たらよろしいではないか。それは金（ゴールド）ならば之を以て今日はまだ外國から物が買へるから調法であるに違ひない。併し乍らその金は日本にないのみならず、今

後アメリカとの關係が悪くなれば金でも物が買へないといふことになる。さうなれば最早や金でも、將來の富を引當てに國家の出す貨幣でも實は少しも違ひないことになるのである。否、今日既にさうなりつつあるではないか。

貨幣と云ふものを從來の國際的の觀念で見ると、その背後に金、或は物が現實になければ價值のないもの様に思ふのである。之を日本國內だけで見るならば金を代表するから貨幣が價值を有つのではない、第一には國家に對する信用、即ち日本の實力といふものが背後にあるからである。然るに從來の國際金融資本的の考へから云へば、日本の拾圓は一定量の純金を代表する、その純金は倫敦に行つても紐育へ行つても同じ價值を有する。日本の拾圓札は清麿公の像がついてゐるからでもなく、日本銀行が出したものだからでもなく、日本國家、天皇を戴く日本のお金だからでもなく、一定量の純金を代表するから拾圓の價值が有ると見るのである。即ち貨幣と云ふものは、國家を前提とするものではなく、全く國際的の存在であると、かう見たのである。貨幣をさういふ風に考へるならば、金も無く、また金に換へ得

る物もないのに、無制限に貨幣を出すといふことは亂暴至極といふことになる。併し國民一般は、お上のお金だから有難いので、そんなユダヤ的從來の貨幣論とは没交渉に、お金を大事にし、お金の爲に働いて居るのである。國民に關する限り、金準備のことなどは何も考へず、ドイツがやつてるやうに一日に假りに一億圓のお金を今日政府が出したとしても、國民は決して、之を價值のない金とは云はぬ筈である。

6 皆んなを富ませよう

自分は日本でも大いに貨幣を出したらよいと思ふ。今日國家の爲すべきことは山ほどある、何れも金に縛られて出來ないである。從來の制限を一廢して、必要があればどしどし支出をしては何うだらうか。之によつて一億の國民が誰も彼も働き、働けばそのお金が頂戴出來るといふことならば遊んで居る人は無くなつて生産の擴充は期して待つことが出來るであらう。從來、資本主義はいかんと云つてこれを排

斥する餘り、苟も戦争で金を儲ける奴はけしからんとして來たのである。それは勿論戦争を利用して不當の金儲けをすることは許さるべきではないが、損をしてまでも物を造れと言つても誰もつくらない、ただで働けと云つても誰も働かない、やはり適當に利益を擧げさせなければやらない。それが人間の天性であり經濟といふものである。君國の爲には甘んじて命までも捧げるのは、日本人は誰でもする。經濟人として經濟の原則に従つて活動してゐるものも、御奉公となればまた別である。この二つの事を混同してはいけぬ。人間の天性は天性として活かし、御奉公は別に要求すればよろしい。さうしなければ物が出來ない、人間が働かない。現に有る物は強制して取り上げ得るとしても、強制して働かすことは出來ない。生産の擴充はソヴェート式では駄目なことは試験濟である、ドイツ流の人間の本性を活用する行き方でなければならぬ。その結果は一億國民が皆んな働く、従つて皆んなお金が行き渡ることになつて差支へないと思ふ。金が行き渡つても消費の統制があり、價格の公定があるから、所謂インフレーションにはならぬ、皆んな金を銀行に預ける

であらう。百二十億貯金を宣傳せんでも、政府が金を出せば従つてこれが銀行に集まるといふことになる。皆んなが借金が無くなつて銀行預金が出來るといふやうになる。現在は使へないけれども、將來、大東亞共榮圏の建設が出來てこのお金が現實に物を代表するやうになればその時はこれが現實に使へる。

これは夢の様な話であるけれども、決して不可能なことではないと思ふ。

一億日本國民といふものはアジアの獨立、アジア諸民族の解放といふ聖業に従事して現に大きな犠牲を拂ひ、絶大の努力をしてゐる。この日本民族がアジア諸民族のうちの最も恵まれたる民族、富裕な民族となることは極めて至當である。支那人に比べても南洋諸民族に比較しても日本國民が一番の金持になり、一番、生活水準も高くなるといふことは絶大の犠牲に對する當然の報酬であるべきだ。現在はまだその途上にあり、皆んな困苦を忍んで居るし、食べるものを食べないでも着るものを着ないでも働く。それに對して後に報いが得られる、將來は完全に今日の困苦が償はれるといふ保證を與へることが必要である。戦争で皆んなが苦しむが、苦しみ

放しぢやない、必ず報いられる。皆んな一様に苦しんで、一様に報いられるといふことにするには、どうしても國家がうんと金を出さなければならぬ。今のやうに緊縮してゆけばかへつて非常な不公平で、持つてをる者は却つて富み、持たない者は益々苦しくなる。例へば今日俸給生活をしてをる者、或は賃銀を得てをるもの、かういふ人達の収入を、今日物價が倍にも三倍にもなつてをるからそれに準じてあげたらよろしい。みんなにその収入を増してやつたらいい。さうしなければ國民經濟は非常にかたわになり益々萎縮して、生産は減る一方である。これはなかなか微妙な問題であるからして、輕率には取扱へないけれども、大體さういふ特殊な經濟政策を樹てたらよいではないかと私は思ふ。その道の人に充分に研究してもらふべき問題である。

三 戦争は富の生産より

1 戦争は生産事業だ

戦争になれば物は必然足らなくなる、みんなが必ず貧乏するんだといふ。それが從來の自由主義經濟の考へ方で、戦争になつたら必ず物が足らなくなり、物が高くなるといふやうに云はれる。が之れは一概にさうは云へない。所謂飽滿國の現在の富は大體みな戦争で儲けたものである、彼等は此の上儲けやうがないから金持喧嘩を欲しない。それを何か、彼等だけが道德的水準でも高い様な事を云つて、持たぬ國を侵略者呼ばはりをする、そして、戦争は勝つても負けても損だ、人民の生活は低下すると云ふ。日本あたりでもそれを眞に受けて平和論をやる者がざらにあつた。みなユダヤ式謀略にかかつてゐたのである。

然るに、例へばドイツの如きは戦前に比較して物持になつてゐる。今後ドイツ國民の地位が非常に向上を見ることは問題ないであらう。私は國が戦争すれば必ず貧乏になるべきものであるとは思はない。イギリス、アメリカの如き國は此の上戦争して儲りつこないものであるが、しかし日本、ドイツ、イタリアといふやうな國は戦争より外に大きくなる方法がない。アジアの民族を白人の搾取から免れしめる以外に我々の生活を向上させる途がないのである。支那の如きも白人の搾取から免れなければ、國民の物質的地位を向上させることは出来ないであらう。

今日、日本の戦ひつつあるのは自分だけのためではなく、さういふアジア全體の爲の戦ひである。その戦争のためにみんなが貧乏しなければならぬといふ筈がない。物が足りないのは目前だけの話で、將來良くなるに決まつてをるのである。勿論我々はただ物質上の利益のために戦争するといふことでは毛頭ないが、併し乍ら現在までアジア十億の人間は白人の搾取で食ふや食はずの生活をして來た。それが自由を恢復するといふことになれば、自然その物質生活も向上するのであつて、精神的

方面を強調する餘り聖戰の物質的方面を忘れてはならない。戦争すればみんなが貧乏してみんなが苦しむといふことは飽滿國の宣傳である。戦争すれば物が足りなくなる、みんなが不幸になる、それにすつかり乗つてゐるのが日本人、日本のインテリ自由主義者であると思ふ。

2 國體の本義に還れ

さういふやうに我々の物質的の條件は將來非常に良くなるに決まつてをるから、今日只今からその保證を國民に與へたらしい。今のところは物を與へるわけにゆかないから將來の約束の意味でお金を與へる、さういふ方法があるに違ひないのである。ただ從來の觀念に囚はれてをるからそれが出來ないではないか。そこで一つ、考へを飛躍させて、從來の西洋で發達した抽象的な經濟學からインフレーションがどうの外國爲替がかうのと、そんなことに囚はれないでやつて行くべきだと思ふ。殊に日本のやうな、天皇を戴く家族國、天皇の御爲に何事も爲されるところの國家

を、西洋の他人同志の集つた、物を機械的に考へる社會に通用する經濟原理をもつて律するといふことは餘程反省すべきだと思ふ。さういふ日本の特殊な國柄を國防國家建設の資本にしなければならぬ。

3 要は世界觀の一變にあり

然るに目前日本の國防の必要がかうして差迫つてゐるに拘らず、國民各層が互に抽象論を戦はしてをる。一方では共產主義の出來損ひのやうな新しい經濟倫理、社會正義と云ふことばつかりを主張してをり、他方ではがりがりの資本主義で、儲からなければ作らんと、一種のサポーターをやつてゐる。元來、今日日本の直面する問題といふものはそんなに複雑なものではない筈だ、極めて簡單に考へてよろしいのである。經濟のことなどは難しい議論をすればいくらでも難しくなる、しかし見やうに依つては簡單至極であるべきだ。皆んなが働きさへすれば物が出來る。だから働かず、皆んなが氣持よく働くやうにする。固より、國體の本義に還へつて、お

上に對し御奉公をする、臣道を實踐すると云ふのが日本獨特の行き方であるけれども、併し乍らそれだけで無制限に犠牲を強ひては第一に可哀さうである。ただ御奉公で、女房、子供も食はせられないといふことではこれはなかなかやれない。損をしてもやれ、といふことは、これは云ふべくして行へない。人間は神様ではない。それには矢張り物質的にも報いられると云ふ事にしなければいかんし、それがまたお上の思召しだと思ふ。お上から見れば一億國民は悉く赤子である。ただこれを苦しめるだけ、犠牲をはらはせるだけと云ふことは、御本旨でないに違ひない。皆んなを氣持よく働かせ、皆んながよくなると云ふ事が思召しにかなふことに違ひない。だからさういふ政治を出現させるといふことが政治家の考ふべきことでなければならぬと思ふ。

年に百億二百億の金を出せといふことは亂暴な云ひ方かも知れぬ、そしてそれだけで行くかも疑問であるが、今日の急を救ふ爲には何か特別な方法をなければならぬ。ドイツあたりでも現にああして見事に成功して居るし、そこを専門の人

だけでなく、皆んなで一つ考へることだ。從來の出来合ひの經濟や財政では到底問題は解決されない。一日も速く、一つでも餘計に物を造らなければならぬ時に、組織がどうだ、理論がかうだと云つて時日を空費してをる。その間に失業する者が増える、生産は低下する、不平不満の聲が至る處に起る、有るものも出て來ぬ、だんだんに日本の經濟が萎縮してゆく。之れでは誠に深憂に堪へない。

日本國民全體の地位を高める、富を増す、今はそれを約束する手形を發行する、それに依つて全國民の勞働力を總動員しようといふのが自分の考への根本である。要するに國防國家を建設する爲めには、生産の飛躍的擴充を必要とする。生産擴充の目的を達成するには、從來の考へ方を改めなければならぬ。新體制の要求はそこに出發する。單に改革の爲めの改革ではない、目的の爲めの手段だ。従つて機構や組織の問題よりは實は心構へを改めること、むづかしく云へば世界觀を一變すること、それが新體制の眼目である。(皇紀二千六百年十二月二十八日講演、皇紀二千六百年二月

號「借行社記事」掲載)

後篇

興亞奉公日に際し内外時局を語る

興亞奉公日に當り、現下の内外事局に就て、聊か所感を述べたいと存じます。今日は内も外も、歴史あつて以來の重大時期であります。日本は未曾有の國難に直面してゐると云はれまするし、世界は正に長期大動亂の眞只中に突入しつつあるのであります。

日本に非常時の聲を聞いてから最早や十年になります。その中最近の三年半と云ふもの、我々は開闢以來の大戦争を支那でやつて參つたのであります。その間に國內の情勢も大變に變つて參りました。十萬からの貴い人柱を出して居ります。親を失ひ、兄弟を失つた方々は幾十萬の多きに達するわけであります。國民の生活も大分窮屈になつて參りました、色々と不便があり困難があります。國民として、一日

も速かに平和安穩の時代を迎へたいと希望しないものはありません。併し乍ら、この非常時は日本だけの原因で起つたものではない、支那戦争も東洋だけの理由、日本と支那とだけの關係から勃發した戦争ではないのでありまして、實は世界共通の已むに已まれぬ深い原因と必然性とに基くものでありますから、日本だけで、この非常時を解消して常時に戻すわけには參らないのであります。

どうしても、之は世界全體として問題が解決されなければ到底治まらないのであります。昨年秋、日本とドイツ、イタリアとが軍事同盟を結んだのも、さうした關係があるからであります。同盟の出來た結果は、日本と英米との間が益々悪くなつて參つたことは事實であります、アジアの戦争とヨーロッパの戦争とが、之によつて漸く相互の聯關性をはつきりさせて來たことも認めなければなりません。併し乍ら、之は強ち三國同盟の結果であるとは申せないのであります。滿洲事變以來、また支那事變を通じて、日本と英米とは、事毎に利害が衝突し、意見が一致しなかつたのであります。彼等との妥協により、彼等との協力に依つて、支那事變を圓く治

め、東亞の新秩序を建設するといふことは、到底その望みがないことが分つたので、日本は遂にドイツと云ひ、イタリアと云ひ、我々と完全に利害が一致し考へが一致する國々と手を握つたのであります。であるから、イギリスやアメリカとの關係が悪くなつたと云ふことは三國同盟の結果ではなくしてむしろその原因であつたのであります。同盟などと餘計なものを作るから、外交の關係がむつかしくなつたと云ふ人があるさうであります、之は本末顛倒の議論であることを特に申上げて置き度いのであります。

かやうに致しまして、今日の世界は完全に二つの陣營に分れて參りました。政治的にも經濟的にも、また思想の上でも、全く相容れない新舊の二つの勢力の對立抗争といふことが、目前の世界大動亂であります。一方は英、米、佛、蘭といふやうな、過去に於てこの地球上の目ぼしい地方を大部分獨占して仕舞ひ、殊に我々の同胞である所のアジアの後進民族を虐げ之を搾取して、今日の彼等の富と勢力とを築いた國であります。他方は日、獨、伊の如く民族は優秀であり、勤勉にして正直、

勇敢にして團結心に富んで居りますが、ただ英米佛などに比べて立ち後れたが爲めに、領土が狭く、物資は足らず、國民の生計も立ち難い、如何にもして、この天理人道を無視し、正義と公平に反した今日の世界を建て直さうと云ふ大勇猛心を奮ひ起した國々であります。かういふ全く立場の異つた物の考へ方の違つた國々との間の衝突でありますから、之はなかなか一朝一夕にして平和の恢復を見ることは困難であります。

例へば支那事變に致しましても四年近くに亘つて未だ解決しないのは、ほんとの相手が支那ではなくつて、支那四億五千萬の民衆を利用し搾取し、支那をいつまでも半植民地状態に残して置かうと云ふ、日本と全く考へが違ひ行き方の違つた英米のやうな國が背後にあるからであることは、今日は誰れも知らぬものはない。これまでは我々は獨力でかういふ勢力と戦つて來た。彼等の様な物質主義、弱肉強食主義の國民には、日本の 天皇とは如何なる御存在であらせられるか、八紘一字の理想とは如何なるものであるか、日支の共存共榮とは如何なる意味か、かういふこと

は分りもせず、また分らうともせず、ただ日本は支那といふ弱い國をいぢめる悪者である、侵略者であると云つて來たのであります。單に悪口ばかりではなく、實際に於ても事變中、英米は随分支那を助け日本の邪魔をして來たことは、我々日本國民の骨身に沁みて忘れることの出来ない所でありまして、彼等が背後にある限り支那事變はいやでも非常な長期戦とならざるを得なかつたのであります。處がヨーロッパ戦争の始まると共に、局面は一變して參りました。なるほど英米は今迄あれだけ日本に敵意を表して參つたのでありますから、行掛り上、依然支那を助けると言つて居り、日本に對しては經濟上益々壓迫を加へて來て居りますが、併し口では何と云はうとも最早や實際上彼等は支那の事に多くかまつて居られなくなつた、支那を有効に助けることが出来なくなつた。今や彼等から見ても、主戰場はヨーロッパに移つて仕舞つたのであります。自然、支那戦争は段々影が薄くなつて參りました。英米といふ主役と申すか舞臺監督と申すか、さういふ者共があらで忙がしくなつたのでありますから、こちらの舞臺が閑になるのは當然であります。かういふ風に

事變の張本人が居なくなつて見れば、後は日本と支那と、もともとアジアの兄弟同志であるから話合ひはらかな筈であります。今の處、蔣介石初めまだ夢が醒めないで、世界の様子が一變して來たことも知らず支那事變の性質が變つて來たことも分らず、依然として英米にたより日本に抵抗を續けて居りますが、今に彼等もほんとのことが分つて參りませう。私は支那事戰だけは間もなく一應片附くであらうと考へるし、また日本としては早く片附けなければならぬと信ずるのであります。

*

併し乍ら、一時遠方に行つてゐる鬼はぢき又アジアに歸つて參るであらうと云ふことを忘れてはなりません。我々の「鬼の居ぬ間の洗濯」もあまりゆつくりは出來ないので、假りにヨーロッパで負けたとしても、なかなかそれだけで引込んでしまふ鬼ではない。彼等の勢力がヨーロッパから締め出されると、今度は彼等に取つてアジアが、今までよりも一層大事なものになつて來る。彼等はこれまでよりも、

一段とアジアに勢力を集中して參ります。日本が、大東亞共榮圈を作ると云ふことは、之は直接彼等の領分が侵されると考へるのでありますから、イギリス、アメリカは之に對しては支那問題よりはもつともつと強く日本に反對するのであります。さうであるならば、彼等がヨーロッパで勝てば勿論のこと、負けてもそれだけでは日本の立場は必ずしも樂にはならぬ。我々のアジア獨立、アジア解放の聖業は、今後は愈々益々大なる努力と犠牲とを必要とするものであることを、覺悟しなければならぬ。

又ドイツと致しましても、イギリスをヨーロッパで破つた、英本土を占領したといふだけでは決して安心出來ないと思ひます、戦争はそれでお終ひにはならぬものと見なければならぬ。イギリスは必ずその海軍力をまとめてアジア方面の植民地や、カナダ、濠洲に據つて抵抗を續けると思はれますし、又アメリカも、今はまだ準備が出來てゐない上に、國論も一致してゐない様であるから、直ちに參戰はすまいが、彼等の再軍備が出來上つたならば公然戦争にはいると見なければならぬ。ル

トズヴェルト大統領などは、昨今はまるで自分が戦争をやつてゐるやうな口吻でありますから、アメリカの参戦は必至と云はなければならぬ。實は今日でも名は何と呼ぼうとアメリカは事實上戦争してゐるのであります。

さうすると、この戦争は全世界に互る恐ろしく長期の戦争になりませう、十年も二十年も續くことが考へられます。日本も無論其の中に捲き込まれる、之は三國條約で明かに決つてゐるのであります。これは見やうに依つては支那事變が擴大して世界戦争になつたとも云へませうし、又東西の戦争が一つに融け込んだとも見るこゝとが出来ると思ふのでありまして、何れにしても、日本が此の世界戦争を袖手傍觀することが出来ないのは明かであります。

この情勢を見て取つて、昨今國內には少なからず、恐慌を來してゐる向もあるやうであります。又何うかして、この勢を喰ひ止めようと努力する人々もあるさうで

あります。併し乍らそれは畢竟無益でありませう、人類の思想が大轉換を遂げるためには、常に長期の戦亂時代を經過して參つてゐるのでありまして、人力を以て之を堰き止めることは出来るものではありません、謂はば歴史の必然であります。

我々日本國民としては、この長期世界戦争に際して、徒らにあわてたり心配したり、又歴史に逆行するやうな行き方を考へたりしないで、何よりも先づ、國內を固め、長期戦を立派に戦ひ抜くの覺悟を決めなければなりません。支那事變の三年半で随分困難も増して來て居るのに、この上また十年も二十年も戦争されて堪るか、冗談もよい加減にするがいいといふお叱りを受けるかも知れない。勿論私も戦争が一日も早く濟むことを希望する段になれば人後に落ちるものではない。併し乍ら、それが今日の大勢であり不可避であるのなら我々としては之に備へなければならぬ。ところが支那事變を戦つて來た通りの方法では、やつて行けないことは明かである、この際我々は根本的に出直さなければならぬ。新體制と云ひ、臣道實踐と云ひ、國防國家と云ふのも實は、この容易ならぬ世界の情勢に對應する爲めにこ

そ、その必要があるのでありませう。

由來日本は世にも有り難い國柄であります。現人神にまします上御一人を大御親と仰ぎ奉つて、國民は何れも血の繋がりに依つて結ばれたる兄弟家族であります。國難に遭遇すればする程愈々その結束を固くするのが、他國に例を見ない日本國民の特質であり大きな強味であります。個人が機械的に集つて、天賦人權だの自由平等だのと、てんでに勝手を振舞ひをする民主主義の國とは大いに違ふのであります。今後如何に長期に互る試煉にさらされましても、日本では内部から破綻を來すが如き懸念は絶対にないのでありますから、先づこれほど安心なことはないわけでありませう。

又我々は地の利を得て居りますから、兵器の發達した今日でも戰禍が日本本土に及ぶといふことは、先づ考へられないのであります。日本と境を接する國としては支那はあの通りであり、ロシアとは、今後は段々關係は良くなつて行きますせう、その方の心配は無いと確信致します。して見れば日本としては今日ただ海面だけを見

詰めて居ればよろしいのでせう。大平洋は廣いのであります、我々は我が無敵海軍に信賴して餘り取越苦勞はせぬがよろしい。老人子供を都會から移すなどいふのは誠に徒らな人騒がせて、百害あつて一利ないことであります。

*

十年二十年の長期戦と申しますと、火花を散らしての武力戦よりもむしろ經濟戦、思想戦が主になつて參ります。即戦即決の短距離競走に對して之はマラソン競走であります。我々の心構へも従つて變つて來なければならぬ。ゆつたりと、神經を太く構へなければならぬ。これまでのやうに戰時だ、一時だ、何もかも一二年の辛抱だと云ふやうな氣持では長期戦はやれません。さうではなくて、之が常態だ、いや戦争をやりながらも之れから段々國內は良くなるのだ、良くしなければならぬと云ふやうな、餘裕のある態度が望ましいと思ひます。それが又、此度の戦争の性格であります。新秩序建設の爲の戦争でありますから、戦ひながら建設をやつて

行くのであります。戦争が済む迄には、内も外もあらかた新秩序が出来ると云ふことであれば、これは理想的であります。

国防國家の建設といふことも、この長期戦に臨むための國內體制を整へることが主眼でありまして、目前は生産力擴充を第一の急務と致しますが、之も矢張り國民の心構へが大切であります。國民がよく今日の國際情勢を認識し、日本の立場を了解し、總力戦の本質を把握して、之れは一つ大奮發をしなければならぬ、我儘は云つてゐられないと心から目醒めるのでなければ、生産擴充は困難であります。政府が何もかも法律づく、権力づくで、強制してやつても決してよい結果は得られない。何よりも人間の本能、人間の天性といふものを活かさなければならぬ。ただ、戦時戦時と云つて、不必要に國民の心を暗くさせ、何等前途に希望を持たせぬやうなやり方は、つとめて避けなければならぬ。固より人心の弛むことは最も警戒しなければならぬが、マラソン競争であり、前途は遠いのであるから、あまりせかせかしてはいけない。由來日本の國民性は朗らかであり陽性であるべき筈であります。

す。大和民族の歴史に於て最大の國難は、天照大神様が天の岩戸にお隠れになり天下が眞暗になつた時であります。その際八百萬の神々は何をなさつたでせう。決して、ただ泣いたり悲しんだりはしなかつた。岩戸の前に集まつて、高天原も揺りとどろくばかりに踊り興じ笑ひざわめいたではありませんか。之れが困難に處する日本民族特有の態度であると思ひます。

*

抑々日本の非常時といふものは初めにも申した通り、人間の智慧でははかり得ない高い深い原因から起つたのであります。滿洲事變も、支那事變も、謂はば天意であつて、誰れの始めたことでも誰れの責任でもない。我々の爲すべきことはその天意を正しく汲み取ることあります。今日、日本國民は、非常時の困苦を課して彼等を試さうとする神々の深い意圖を誤りなく擲んでゐると思ひます。誰れ云ふとなく、支那事變の解決は八紘一字の皇謨に即して行はれなければならぬと云ふのが今

日輿論となつてゐます。また國內の新體制は、一億國民の臣道實踐を可能ならしめることを以て、眼目とすべしといはれて居ります。日本の内外非常時が斯くの如き方法を以て解決さるべきものであるといふことに期せずして國論が一致いたしましたのは、誠に素晴らしい事實であります。これは、日本民族が有史以來の難局に當面して、よく國體の本義を想ひ民族の使命に目醒めたことを語るものでありまして、この自覺に基き、この精神を貫くならば、百の内憂も千の外患も少しも恐れる必要はないと存じます。

今までは、何と言つても支那相手の戦争であるといふ氣分で、國民もまだ眞劍にはなり切つてゐなかつた。それと多年、英米流の考へ方に染まつて居り、個人主義、物質主義の悪思想が抜けなかつたから、戦時體制に色々と缺陷があり、従つて國民は不満を唱へ、生産は減退し、ある物も出て來ないといふ有様でありましたが、いよいよ世界的の長期大動亂の渦中に日本もいや應なしに巻き込まれるとなれば、國民の覺悟も自ら違ふでありませうし、國體觀念も一段と徹底して來ることでありま

せうから、我々は今後に大いなる期待を持ち得ることを確信致すのであります。

日本にこの持久戦、總力戦の體制が出來さへすれば、國難の突破は勿論、國家の前途は洋々たるものであると思ひます。今日の戦争は世界の舊體制の行詰まりが、根本の原因でありますから、その行詰まつた舊體制が敗退することが自然でありまして、新舊の兩勢力が、大なる犠牲を拂ひ死力を盡して戦つた後に、再び舊體制が勝つて、一切の犠牲も苦勞も水泡に歸するといふことは、これは人類社會の進化の理法から申しても到底考へられないことでありまして、日本としては、舊體制に未練を残し、これと共に没落するといふ重大なる過ちを犯さない限り、決して將來に不安はないと存じます。(皇紀二千六百一年三月一日放送)

世界と日本

二二四

ヨーロッパ戦争は有史以來の大變局であつた。この戦争一段落の後に新しい時代の黎明がもたらされたといふに感じられた。所謂自由主義、デモクラシー、國際平和主義といふのがその當時の合言葉であり、國際聯盟といふやうな未曾有の大規模な集團平和の機關も出來、これを以て恆久平和がもたらされると考へた者も多かつたのである。就中、總べてに感激性の強い日本人は、西洋人が大戦後の現状を維持する目的をもつて作つたこの機關を眞の恆久平和機關と信じて、彼等西洋人よりも更に眞面目にこの風潮に適應しようと、日本國內でも熱心にいろいろな活動がなされたのである。然るに一時は實現されるかと思はれた永久平和の夢は忽ちにして破れ、この數年はまた再び世界の各方面に非常なる波瀾が惹起されつつある。今

日の情勢からみれば、この二十年といふものは實は休戦状態で、ヨーロッパ戦争が實際には未だ片附いてゐないといふのが現實であると云へる。

今日の世界の動搖、この二十年間の不安といふものは結局、人類思想の大變轉期に我々が際會してゐるといふことを物語るものである。ヨーロッパ戦争が如何にして起つたかといふことは今更^ま諄々しく述べる必要はないのであるが、一言にして云へば、十九世紀以來の西洋文明は必然的に戦争の原因を藏して居つたが、それが偶機が熟して勃發したまでである。而も戦争の根本原因には何人も目を蔽ひ、ヴェルサイユ體制を以て一時の平和を糊塗した。それが忽ちにして破綻を來し今日眼前の大動搖時代が再現したのである。その西洋文明に内在する戦争の原因といふものは要するに近代物質文明といふものの本來の性質がそれであつて、いはば人類の宇宙觀といふものが變化しない限り、どうしても戦争は避け得られないのである。

今日一方には依然として資本主義を基調とするところの所謂デモクラシーの國々があり、他方には個々の人間の經濟生活を第二義的にみるところの全體主義國家群

といふものがあつて、それが對立して衝突の危機を孕んでゐる。歐洲大戰は各交戦國がいづれも資本主義、個人主義の文明の下に立つた國で、その間の戦争であつたが、今日若し戦争が起るとすれば、恐らく個人主義諸國——即ち人民戦線の諸國と全體主義諸國の大争闘となるのではないかと思ふ。併し所謂全體主義國家と人民戦線の諸國との對立といふものが、本質的に宇宙人生に對する根本理念の相違から出てゐるかどうかは實は未だ明瞭にはなつて居ないのであつて、今日の全體主義諸國も本質的にはまだ目覺め切つて居ないのではないかと思はれる節もある。來るべき大變局の結果として全人類の物の見方、考へ方が根本的に變化すると云ふ時代が來なければならぬのではあるまいか。さうならなければ、まだまだ人類の歴史といふものは本當の平和、本當の理想の世界を迎へることが出來ないのでないか。結局、我々人類の前途は極めて遠遠であるといふことに歸するのである。私は日本の使命といふことに就て後に簡単に述べようと思ふが、その日本の使命が達成せられる時に初めて歴史の新しい頁が開かれるのではないかと思ふ。

今日の世界の情勢を極く簡略に述べると、ヴェルサイユ條約といふものは戦勝國がその得たところのものを護らうとして作つたものであるが、その中の主なる條項は今日殆んど跡形もなく毀されてしまつた、當分再起の見込はないと思はれてゐたドイツが最近急激に擡頭して來た。又ヨーロッパ、アメリカから常に輕蔑の眼をもつて見られてゐたイタリアがムッソリーニ首相の下にこの十七、八年の間に完全に更生して偉大なる實力を發揮して來たためにヨーロッパの現状維持的諸國は非常なる不安を感じて居る。他方東洋に於ては大戦後、英米佛等の戦勝國が今後の世界の平和を亂すものはただ一つ日本であるとして、嘗ては彼等の與國であつた日本をワシントン會議に引出し、裁判所が罪人を裁くやうな具合にワシントン體制といふものを押付けたのであるが、日本が滿洲事變を契機として、敢然この桎梏に反抗して立つた。そして今日眼の前に歐米諸國の非難攻撃にも拘らず全支那大陸を涯から涯

まで席卷して居る。最早や支那といふものは日本が完全に制御し得る地位にあつて、何人もこれに對して一言も苦情を言はせないといふ時代が東洋に來た。しかも東洋の日本が全體主義のドイツ、イタリアと防共協定によつて繋がれた。假りに、一九一七年頃急に日本とイタリアが獨逸側についてしまつた、米國はつひに戦争に加はつて來ない、然してイギリス、フランスはその間に軍備を著しく減らしてしまつた、ロシアの向背も甚だ不明であるといふ事態を想像して御覽なさい。それが大體今日の世界であつて、所謂デモクラシイ諸國がこの局面に於て非常なる不安を持つのは當然のことである。今回の支那事變は斯ういふ謂はば日本に最も都合のいい時期に起つたともいふことが出来るのである。従つて戦争に關する限り一應日本が成功すべきことは問題ない。

日本が今次の支那事變で一年足らずの間に發揮した實力といふものに、全世界は驚嘆してゐる。ドイツ、イタリアは益々日本に接近して來た。彼等は日本と結ぶ以上は現状維持諸國に對して敢て屈する必要はないと感じて居る。現状維持の諸國からみると、日本が滿洲事變以來、大陸政策に着々成功し、そして支那に於てもあらゆる豫想を裏切つて遂に成功せずにはやまないといふ情勢になつて來たので、非常なる不安を日本に對してもち始めた。今日既に新しい一種の黃禍論といふものが現はれて來て、フランスあたりでは新聞雑誌が黄色人種の恐るべきことを頻りに書き立て、ドイツ、イタリアが日本と結ぶことは白色人種に對する叛逆であると説いて居るのである。

今日の情勢からすれば、この黃禍論といふものは曾つて日露戦争後ドイツのカイザーが政策上説いた架空の黃禍論とは違つて、或る意味に於ては現實的な根據があるのである。歴史上にこれを見ても、古來この地球上で優勢であつたのは黄色人種を初めアジアの民族であつて、西洋人は十四五世紀までは次第に西方に追ひやられて遂に海上にはみでざるを得なくなつたのである。その結果、必要に迫られて、彼等は一方に於ては航海術を發達させてアメリカを發見し又印度に到る途を開いた。他方には丁度其時に機械といふものが色々と發明された。この二つの武器を以て海

を廻つて背後から有色人種を衝いて來た。そして彼等の植民地を各地に作つた。言ふまでもなく支那をも半分植民地として之を搾取して居るのである。

白色人種はこの有色人種を搾取した富を以て十九世紀の資本主義文明を作り得た。然るにその資本主義に内在するいろいろの害惡の爲に彼等は今日四苦八苦してゐる。今日彼等の社會は根柢から蝕ばまれ、また有色人種たる日本人が彼等の發明したところの機械を完全に利用して黄色人種を糾合し、彼等の牙城に迫らんとしてゐる。かういふ風にみるのであつて、歴史上からみても常に有色人種に押されてゐた白色人種が先に述べた如き不安を起すことは必ずしも理由のないことではない。

然らば果して日本は彼等の恐れるが如く所謂黄色禍を以て西洋を脅かさんとするものであるか、これは今日我々が内外に向つてはつきりと語らなければならぬ問題ではないかと思ふ。

日本の今日までの發展を目して從來歐米諸國はいづれも日本は西洋の眞似をして西洋式の帝國主義、膨脹政策を實行して來たと見てゐる。また日本のうちにもさういふ考への人も、相當あると思ふ。例へば我々は今次事變に於て日本は領土的野心はない、求むる所は支那との提携で、支那を救濟せんがためにこの戦争を戦つて居るのであると云ふのであるが、これは中々西洋人には理解出來ない。西洋流の考へ方では判らない。また、日本人のうちにもさう云ふ御目出度いことでどうするか、イギリスがインドを取り左團扇でやつてゐるやうに、我々も支那といふものに依つて安樂な暮しをしなければならぬと云ふ考へをもつてゐるものが少くない。このことを我々は深く反省しなければならぬ。

その様な考へ方で大陸政策をやるならば、成程日本の實力を以てすれば、滿洲國も支那も完全に日本の勢力のうちに收めることは出來るであらうが、大陸に伸びて行く日本が斯くの如き政策を遂行するといふことであるならば、これは白人種の國が結束して日本に對抗して來ることは明瞭である。幸に我々が實力をもつて白人

種の大同團結に勝ち得たとしても、さういふ覇權は決して天が許さない、永續する筈はない。日本の歴史に照して、我々の使命は決してさう云ふものでないと確信する。

今日、日本に於ては思想的に國內が二つに分れて居る。一つは西洋の個人主義的、自由主義的、唯物主義的思想であり、一つは日本の國體の根本義に則つた全體主義的思想である。この二つの思想系統が今正に相剋を續けて居るのであるが、外交對策を論ずるに方つて西洋流の自由主義の側の人々は何れも平和主義、國際主義を主張する。自由主義は今日の日本に於ては平和主義の同義語とまでなつて居る。併し、よく考へて見るとそこに大きな矛盾があると思ふ。これは矢張り無自覺なる西洋模倣から來て居るのであつて、アメリカ、イギリス、フランス等で唱へられる平和主義、國際主義と云ふものは、ものを持つて居る側の言ふことで現に持つて居るものをその儘に維持して行かうと云ふことが彼等の主張の根本である。それがために唯戰爭するなと云ふのでは通らないから、彼等は宗教的口吻を以て正義がどうだ

の人類愛がかうだのと色々和美名を設けるのである。日本人は純眞であるから、かういふ西洋の物を持つてゐる國々がその現状を維持するために並べ立てるその美辭麗句といふものを、これは實に有難いものであると云つて隨喜の涙をこぼしてその儘これを受賣りしてゐる。然るに冷靜に考へて、若し日本が西洋流の個人主義、物質主義、自由主義に左袒するならば日本は大いに戦はなければならぬ、大いに支那を取らなければならぬのである。何處までも戰爭して勝つて領土を擴めて物質上の生活水準を高めなければならぬわけである。之が西洋先進國の歩んだ途ではないか。之に反して何處までも日本の國體に則して國策を樹てるといふことであるならば、建國の昔から日本の理想といふものは決して他を侵して所謂帝國主義的發展を遂げるといふことを許さないのである。然るに今日の世の中では國體論者は一概に右翼と呼ばれ、侵略主義者、膨脹主義者と稱せられて居る。これは帝國主義の英米が皇道日本を侵略者と呼ぶと同じ不合理であつて、事が少しく顛倒して居る様に思はれる。抑々西洋流の考へ方の人は侵略者となり、日本流の人は平和主義者、

眞の意味の平和愛好者でなければならぬ筈ではないか。

*

いづれにしても西洋流の考へ方と東洋流の考へ方といふものは今日、日本國內を二つに割つて居る、のみならず世界を二つに分けてゐる。今日では世界が人種別に別れてゐるのではなくして、西洋に於ても東洋流の人生觀、哲學觀を解するドイツ、イタリアなどがあつて、一時世界を風靡したところの自由主義文明といふものは最早や終期に近づきつつある様に思はれる。日本でも最近はや急激に全體主義的の考へ方、日本の國體の本義に副つた物の見方が不可抗の勢を以て前進して居るのである。この問題について、更に少しく私の考へを述べるならば、私は矢張り、この世の中の一切のことを個を本位としてみるのは誤りであると思ふ。これは人間について言つても、我々は天から降つたのでも地から湧いたのでもない。過去に無限につながる祖先があり、そして將來に永遠につながる子孫がある。各人は永遠から永遠に

つながる連鎖の一環にすぎない。我々は五十年か高々百年の壽命、これは一面から見ると相當長い期間であるが、永遠といふ連鎖の一環としてみれば、實に一瞬時にすぎない。謂はば石と石とがぶつかつて火花を散らす、その火花の中に身を寄せてゐる我々である。斯くの如き存在を中心として之に無上の價値を認め、「自己の完成」などと云つて過去も將來も無視するやうな考へ方は、根本に於て私は間違ひであると思ふ。

時間的に見てもさうであるが、空間的にみても個人は決して獨立に存在するものでないことは説明の必要がないのである。よく個人の自由といふやうなことを言ふが、自由などと言ふものは何人も有たない。思考の上から云つても所謂自由意思なるものは存在しない、我々は一見勝手に思考し意思するが如くであつても、實は已むに已まれぬ一定の因果律に縛られてゐるのである。身體・行動の自由に就ては猶更ら明かである。現に我々は假りに目方が十五貫あるとすれば、その十五貫の力で地球に引つけられて居る。左右前後、上からも下からも空氣に壓縮されてゐる。自

分では如何にも自由に動いてゐると考へるかも知れぬが、實は動きのとれない周囲の裡にゐるのである。抑々我々は地球上に棲息してゐるのであつて、この地球といふものが我々を絶対に支配して居る。地球はまた太陽に依つて絶対に左右され、熱も光も總てを太陽から得てゐる。太陽といふものも銀河系宇宙の一恆星にすぎない。この地球上の人類を十七億として、一人當り六十位の無数の星が銀河系の中にあるといふことであるが、その星が悉く太陽のやうなものなのである。そして何れも銀河系宇宙の中で全體として回轉して居り一つとして勝手に動き廻つて居るものはない。そして又銀河系宇宙の外に更に、天文學者の言ふ所によると無数の星雲がある。何れも銀河系の世界にまで發展すべき色々の段階を示して居ると云ふ。想像もつかぬ、さういふ大きなこの宇宙が常に全體となつて動いてゐるのであつて、その間に在つて塵一つでも勝手氣儘には振舞ふ事が出来ないのである。何處に個の自由などと言ふものがあらうか、自由と見えるのは畢竟宇宙の法則に従ふ場合のことである。自由は服従を意味するとはこの謂である。斯くの如く全體的に宇宙萬物を観るのが

正しい考へ方であると私は信ずる。之を假りに天文學的の觀方と云ふならば、個を引離して考察するのはラポラトリーの研究者の態度であつて、之は物理學的、顯微鏡學的な觀方と云へるであらう。

ところが最近代の物理學といふものは物質を分子から原子、電子、微粒子などと段々分析して行つてたうとう何もなくなつてしまつた。物の本體は確固不動ではなく、一つの機能だとか、波動だとか、エネルギーの場だとかと説明せられる様になつた。さうすると云ふと唯物史觀的の考へ方は根據を失つて仕舞ふ事になる。これは最近の科學の示す所である。西洋でも科學が巨視的にも微視的にもここまで進んで來ると、最早や從來の機械的な宇宙人生の觀方を變へなければならなくなつた。今日識者の中には從來の唯物思想、個人思想は誤りで、東洋の全體主義、神祕主義的思想といふものが人間の社會に就ても正しい考へ方ではないかといふことに氣づいたものが多數にある。今後益々さうなるのではないかと思ふ。

さて、話は少しく軌道をはづれたが、我々の祖先は今より七十年前、日本の國體

の根本義に還つて新しく國を樹て直さうといふ努力をしたのである。斯くして打立てられた維新政府は當初は國體、皇道に重きを置き、祭政一致の建前で諸政の大革新を志したのであるが、當時世界の情勢を見ると日本は如何にも物質的に遅れてゐるといふので、物質的に西洋の水準に達するまでは日本は餘り精神的のことにのみ構つてゐられないといふ實情であつたために、それから半世紀に亙つて一にも二にも西洋模倣で今日までやつて來た。ところが今日は物質的には遂に西洋の水準に達した。しがも物質文明のもつ缺陷といふものをまざまざと感じさせられた。そこで一つ我々は本來の自分に立歸らなければならぬといふことになつたのである。

明治維新の原動力としてやかましく唱へられた國體、皇道といふことが今日新しく叫ばれて居るのは、そこに意味がある。永らく西洋式に教育された人は、神ながらの道とか皇道とか尊皇とかいふことを唱へる人を神がかりと言つて、最近まで、現在もなほ排斥して居る。

併し乍ら、さういふ人々は謂はば枝葉末節に屬すとも見らるべき知識の集積に没頭して肝腎要めのものを逸して居るのではないか。我々日本人にとつて一番大切なことは、日本の民族は歴史の抑々始まりから一貫した使命をもつてゐると云ふ事實を自覺することであると私は信ずるのである。

*

日本民族の起原についてはいろいろな説があるが、日本人は朝鮮、蒙古、滿洲、大體さうした人種と同じもので所謂ツングス族に屬すると云ふものが多い。併し私はその方面の永年の研究者である専門の大家に聞いたのであるが、その觀方は根本に於て誤りであるさうである。成程、朝鮮人、滿洲人、蒙古人は日本人に似たものをもつてゐるが根本に於て決して同種族ではない。地球上に日本民族といふものはユニークな人種で他に類型がない。恐らく太古諸民族の大移動の行はれた時代に日本民族は最も優秀なる地方を占めることが出來た。最も優れたる民族が最も優れたる環境に置かれたるが故に今日の大をなしたと謂ふのである。優秀な民族が優秀な

地方を占めるといふことは歴史上及び現在地理的分布をみても明かである。下等な人種はニグロ、ホッテントット、ブッシュユマン、エスキモー等の如く暑い所、寒い所、瘠せた土地に追ひやられて、優秀な民族が優秀な土地を占めるのである。

私は世界を廻つてみて、氣候から風土、天然の美、土地の豊穰、總ての點でこの日本の島々ほど恵まれた地方はこの地球上にないと思ふ。それ程優秀なこの土地に我々の祖先は何千年或は何萬年生棲したことであらう。

神武天皇から數へても日本の歴史は二千六百年になるが、その以前にも我々の祖先はこの島に何千年もの永い年月棲息して居つたことは疑ひなき事實であつて、文字がなかつた爲め史實としては充分に傳はらないが、非常なる年月の間我々はここに棲んで居つて、その間に徐々に發展して今日に至つた次第である。恐らく我々の祖先は大陸から移つて來たものであらうけれども、その時に大陸と日本と分れて居つたかどうか疑問であつて、何處から來たかといふことは餘り重要でないと思ふ。何千年或は何萬年に亙つて日本人はここに集團的生活を營んで來た。そしてその多

年の民族的生活の結晶とも云ふべきものが神典に傳へられる所の諸々の事實であつて、要約すれば、天皇崇拜の思想、天皇教である。

神ながらの道といふのは一つの民族宗教である。これはそれだけをみると外國にも例へばユダヤ民族などは矢張り民族宗教をもつて居つた。併し乍ら神典に基いて學問的に説明せられる所に從へば、日本の民族宗教に他と異つて居る點は、日本の民族宗教が直ちに宇宙宗教であるといふことにあるのではないかと思ふのである。日本の神道又は皇道が民族宗教である限り他民族には通用しないであらう。朝鮮にも何うかと思ふが、滿洲國や支那には民族宗教の形では通用しないと思ふ。古神道は然るに形式から云へば民族宗教として今日に至つて居るのであるが、精神から云へばキリスト教や佛教のもつてゐる總てのものを包容して更に餘りがあるものであるといふことを考へなければならぬ。西洋の學問をした所謂インテリは神と云ふとゴッド、キリスト教のゴッド、萬能の超人間の存在を考へるが言ふ迄もなくこれはユダヤ民族の民族神であるエホバの神、これをキリストが宇宙神にまで擴充した

ものである。我が民族の神は天御中主神——天照大神——現人神であられる。天皇と連続一體にましますといふことが、我々日本人の絶対の信仰であるが、神道は全宇宙を包容するものであり、その神は宇宙の絶対真理を表現するものであるとすれば、單にこの日本の島や日本民族だけを對象とするものでない筈である。

*

かういふ觀方からすると、天皇の御政治が如何にあるべきか、日本の外交を如何にすべきかといふやうなことは直ちに明瞭になると思ふ。

天皇は御神勅によつて朝夕 天照大神として御鏡を拜して居られる。即ち御自身を神と御覽になるのである。二六時中、御自身の御神格を反省遊ばされるのであつて、茲に最も高き意味に於ての祭政一致を見るのである、斯くの如き崇嚴なる事實は他に之を見ない。

神として日本國民を治められる、神として凡ゆる人類に臨まれる、これが 天皇

の御性格である。斯くの如き根本原理が明徴になるならば一切政治の缺陷といふものは立所に消え、凡ゆる人類社會の惡といふものは、その存在を許されぬ譯である。さればこそ日本の政治が悪くて人心が險惡になると、何時でも國體の根本義に戻れといふ叫びが起る。そして立所に革新が出来るといふのが日本の有難いところである。これは明治維新もさうであつたが、今日再び國體明徴の聲が起つて來た所以である。

昨今國內革新といふことが頻りに唱へられて居るが、要は國體の本義に還る、國體を明徴にするといふことに盡きる譯である。革新といふ事は單に政治や經濟の形式を變へるといふことでなくして、國民の思想を變へることではなくてはならぬ。國民の思想、精神と云ふものをその儘にして革新を行はんとすれば勢ひボルシエヴィズムとかファッシズムとか他國の例に倣つて専ら形而下の改革に趨らざるを得ないことになるのであるが、今日の日本に於ては、西洋の方法そのままの革新をする必要はないのである。

外交の方面に就て言つても、今日まで朝鮮でも臺灣でも、また滿洲に對しても日本の行つて來た所を大きく觀れば、同じく國體の本義、建國の大理想に立脚して行はれてゐるといふことがよく分つて來る。今後我々が如何なる政策を支那にとるべきかといふことも我が建國の大精神に照して考へさへすれば明かなことであつて、大陸經營もこの精神で事に當つたならば、その結果は急速に現はれて來る。さうして西洋諸國が侵略と感ずるところのものも立所に性質が變つて來る。日本の行ふところは彼等自身が從來とつてきた侵略政策とは似ても似つかないものであるといふことが明かになるであらう。今日彼等は日本を頻りと攻撃してゐるのであるが、この攻撃はやがて日本に對する禮讃に變るであらうことは明かであつて、要は早く國民が目覺めることである。今迄のやうに國民を指導すべき立場にあるインテリ層が依然として眞面目に國體の本義から割出してものを考へる人々を輕蔑するといふことではならない。

諸君は外交官である私がこんな話をしようとは豫期せられなかつたかも知れぬ。

併し、私は滿洲事變以來、大體かういふやうな氣持で日本の外交の一端に携つて來た。從來、私の言ふことは矯激であり、亂暴であると評されたのであるが、國體の本義とか 天皇の御神格といふやうなことは輕々しく口にすべきことでなく、特に外國方面に向つて時機の熟せぬうちは、さういふ物の云ひ方は慎しむべきものと考へたので、滿洲事變當時は理論鬭争に於ても賣言葉に買言葉で専ら西洋流の理論を用ゐた次第である。

併し乍ら、有史以來の大事變たる今次の變局に臨んでは、最早や從來のやうな姑息な態度は許されない。外部に向つて云ふと否とは別問題であるが、少くとも日本國民自身はこの際、大膽にはつきりと、日本の使命とか天業翼賛とかいふことの眞意義を把握しなければならぬと考へるのである。國體、皇道、天皇の御神格といふやうな問題は私自身、折角勉強中であつて人に説くほどの素養はないのであるが、之等の問題について諸君の關心を深める一助ともならうかと考へて未熟なるままに自分の所信を述べた次第である。

支那事變の始末が具體的に何うなるとしても、今日までの成果から見ても事變後、世界に於ける日本の地位が非常なる飛躍を遂げることは疑ひないと思ふのであつて、少くも物質的には八紘一字の大理想實現が略々具はるのではないかと考へられる。日本が物質的に急激に實力を増すことは、若しそれが精神的の飛躍進歩と雁行するのでなかつたならば世界に對して大きな脅威となり、日本國民自身のためにも色々の危険を伴ふ結果となりはすまいかを恐れる。

日本の精神的、思想的一大飛躍が今日程強く要求せられる時代はないと私は信ずるのである。(皇紀二千五百九十八年十一月帝國大學講演)

ボーア教授歓迎の辭

デンマークに於ける日本の代表者として今夕の貴賓に對し一言歓迎の辭を述べらる事は私の最も名譽とし欣幸とする所であります。ここにお集りの如き偉い學者先生方の中に交つては、私の如き職業の者は甚だ勝手違ひであり、何を申上げてよいか一寸途方に暮れる次第であります。殊に、さきさきの方が何も彼も皆を仰言つて了つたので、私はただ陛下の忠良なる全權公使として、ボーア教授が從來日本學徒のコーペンハーゲンに遊學する人々に一方ならぬ御懇情を示された事に對し篤く御禮の言葉の述べる以外、多く申上げる事もないのであります。この公式の義務を果しますと共に私は黙つて坐つてもよろしいのであります。只今ボーア教授の演説の一節を拜聴しまして、私の多年抱懷して居つた事柄に就て一言したい様な氣持ち

が致します。

私がこの數年來、理論物理に興味を持つて來たと申したら、皆様は微笑されるでせう。若し私が放射とか波動力學とか量子説とか光量子とかと云ふ様な事柄に就ての深奥な理論を假令一應なりとも了得して居ると申したならば、今度は皆様は屹度吹き出されるでありませう。いや、私は決してそんな大それた知つたか振りを申す意思是毛頭ないのであります。ただ私が申し上げたいのは、私の素人考へでは、最近代の偉大な物理學者は分子や原子を分割し分析してたうとう何もなくして仕舞つた様に思はれる事であります。物質にはこれ以上小さくはならぬと云ふ最小限の無い事を立證されたのであります。この近代科學の説く所は東洋古來の根本思想たる物心一如、色卽是空と云ふ様な事を確かめるものではないかと思ふのであります。

科學がここまで進んで來た以上、西洋の人々の人生觀も當然一變すべきであり、東洋人の物の考へ方に對する西洋人の態度も根本から改められて然るべきではないでせうか。從來、非科學的と云はれて來た東洋の神祕主義なるものも世人は今や之

を見直さなければならぬのではありますまいか。これは獨り西洋のみならず東洋に取つても頗る重要な意義のある事ではないかと思ふのであります。今日、日本に於ては、東洋傳來の思想精神に還れ、西洋の思想を棄てよと云ふ事が強く叫ばれて居るのであります。科學を以て西洋唯物主義の侍女に過ぎないと爲す人々を澤山見受けるのであります。之等の人々は、多分、科學と云へば直ちに應用科學を思ひ出し、又十九世紀の機械的宇宙觀を脱し切れなかつた時代の科學を指すものと思はれます。斯くの如き誤つた考へを持つて居る人々に取つては、最近年に於ける理論物理の新學説を一瞥する事は最良の解毒劑ではないかと思ひます。

でありますから、私はボーア教授に對し、單に世界的大學者として、又日本の友人としてのみではなく、東洋と西洋との二つの世界を結びつけると云ふ大きな仕事に携はられる偉大なる選手として、ここに心からなる歓迎の言葉を述べたいと思ひます。(皇紀二千五百九十七年四月、東京會館に於けるデンマークの物理學者ボーア博士歓迎會席上にて)

外交辭令

古來、外交の「いろは」として言葉はやさしく事實は強くと云ふ事が教へられて居る。實際にも戦争に至る道程に於ける外交文書は多く穩かなものだ。日露戦争前、時の外相小村侯が米人顧問デニスン氏にロシア宛の公文起草を命じた時、デ氏は侯に向つて日本政府に一戦の覺悟ありやなしやを聞いた。若し戦争を辭せぬのなら言辭は柔かくするがよいと云つたので侯は出来るだけ調子は穩やかにする様にと云つた有名な話がある。之は大體今日も踏襲されて居る慣例で、何かの事件で外國側からいやに強硬に言つて來る時は先づ問題は難かしくならぬと見てよい。之に反し底氣味悪い程溫和しく出て來た時は警戒せねばならぬとせられて居る。して見ると、外交上に言葉を慎めと云ふ原則は今日では寧ろ反對に取つてもよいと云ふ逆説も成

り立つ譯であるまいか。強い事を云へば却つて相手を安心させ、弱く出るとあべこべに一種息づまる空氣を生ずると云ふ事が實際にも多くその例があるのである。殊に昨今はヒットラー、ムッソリーニ、スターリンなどの獨裁政治家が一つには内政上の考慮から随分思ひ切つた事を外交上にも云ふものだから、本來お上品な英國政治家なども大分かぶれて來てスワヴィテ・イン・モードの原則は漸く影が薄くなつて來た。併しそれが却つて實際には緩和劑になつて居る。日本あたりでは殊に外交官などは未だ正直に古典的外交文書式を模範に取り、露骨な事を云ふ者を異端者扱ひにして居るが、此頃の様な國際間の空氣では、さうした行き方は往々にして思はぬ結果を生む事を豫期しなければならぬ。強い外交をやる爲めの隱忍自重ならば結構であるが、ただ溫和しくして居ると西洋人や支那人はこちらを見くびる。支那事變や滿洲事件は皆なさうした關係から我が外交當局の豫想もせぬ進展を見た實例である。歴史を見ても戦争と云ふものは多く平和政策を取る政府が局に當つて居る時に起つて居る。一つには政府が腰抜けだと國民が憤起する、戦争をやり易い空氣が

生れるのかも知れない。とすれば軟弱外交もまた時にその效用なしとせぬわけである。併しそれは戦争が實際必要であり、その準備もあり、そしてその結果の好かつた場合の事で、外交は戦争とは兩立しない、戦争を避けるのが外交の任務だとの考へは根本に於て誤りであり、多くの場合危険な思想だ。古來の偉大なる外交は大概戦争に關する外交である。國家間の關係で戦争程重大なものはないのであるから、それに外交が指導的立場を取らぬと云ふ事は、觀念的にも成立たない譯だ。滿洲事變以來、日本外交が後に引込んで仕舞つたのは何としてもノーマルの事態ではない。國內關係で外務省の威信失墜などは何うでもよいが、外國方面でこの状態を目して頗る日本に不利な結論を下して居る、即ち日本の大陸政策は兵隊がやつて居るのだ、文官並に國民は無關心なのだと云ふのである。従つて肅軍の聲に軍部が溫和しくなつたとなると、いかにも日本の政策が立所に軟化するかに考へる。その結果は支那事變と云ふ事になつた。先般のバネー號事件などでも米國では、あれは一種の二・二六事件だ、兵隊が政府や上流階級を困らす爲めにやつたのだと云ふので餘計に騒いだものだ。外交が軍事と分離し寧ろ對立すると云ふ考へは斯くの如く色々と海外的にも不利を招くのである。スワヴィテ・イン・モードはよいが、フォルテイテ・イン・レが伴はなければならぬ。強い決意あり充分の準備あつての外交辭令は差支ない。ほんたうに國家の大局から戦争を避けねばならぬ時は、ただ親善の口頭禪にのみ依頼しては駄目である。結果は却つて反對になる。例へば今日の日本の立場としては米國との親善は大切である。然し、一にも二にも米國の歡心を買はんとする態度は決して所期の目的を達成する所以でない。英國とは多くの問題に於て不可避的に衝突するのは殆んど宿命だ。かと云つて一にも二にも英國攻撃は感心しない。強い決心を持つと共に、ここには表面は柔げるが賢明だ。格言と云ふものには矢張り教訓が含まれて居るものである。(皇紀二千五百九十八年二月「國民評論」掲載)

全體主義と人民戦線

米國大統領が過般の議會教書に於てデモクラシーの擁護を強調して所謂全體主義國家群に對し挑戰の手袋を投げたことは、當時著しく世界の視聽を惹いた。同教書中、大統領は次の如く述べてゐる。

「國際協約に依つて世界の平和を維持するといふことは、民主主義的、議會主義的國家の手に委ねられる場合、最安全である。言を換へていへば、世界の平和は、民主主義を拋棄し、又は、この主義が曾つて發達しなかつた諸國に依つて、最危険にさらされるのである。米國民は、將來に互つても、世界の民主主義は、決して滅びないのみならず、今日これを有せざる諸國に於ても、必ずその恢復又は確立を見ることを信ずるものであつて、人類の平和は、一にかかつてこの民主主義的信念に

存する。」

これは往年、大統領ウキルソンが大戦参加に當り、國民精神總動員の標語として「世界を民主主義の爲めに安全にする」と宣言したのを思ひ出させる節がある。國內の經濟・社會問題解決の一助として大軍擴案を議會に提出する事前工作と見れば或は深く咎むるを要しないかもしれぬ。併し、これが今後に於ける米國外交の樞軸であり、指導原理であるならば、その影響する所頗る大なりと謂はねばならぬ。米國の一般輿論が斯くの如き方針を是認するや否やは、世界を再び大戦争の渦中に投ずるか否かの分岐點として、今や全世界の絶大なる關心を呼びつつある。

抑々デモクラシーの思想は過去多年に亙り、世界の政治哲學の分野に於て壓倒的の優位を占め來りたるものであつて、一時はこれが世界各國民の政治形態の最後の言葉であるかの如く思惟せられ、民主主義政治の實現の程度がやがて特定國民の文化の程度をも決定するやに見られた時代もあつた。併し乍ら、凡そ一國民一民族の政治的理想は、彼等の國民性並に特にその歴史と密接不可離の關係を有するもので

あつて、甲の國に適應する原理が直ちに乙の國にも當て嵌まるべきものではない。従つて何れの政治體制が最も可なりとか終局の理想を代表するものなりとか、一般的の斷定は下し得ない筈である。現に民主主義の華やかなる時代に於ても所謂議會主義は多くの國々に於て極めて不完全にしか實現されなかつたのである。これは思ふにデモクラシイが、必ずしも時と所とを超越したる理想の政治形態にあらざる事を事實に立證するものであらう。ヨーロッパ大戦後、デモクラシイの諸國が經濟的軍事的にこの世界を完全に風靡し得る地位に置かれながら、事實は却つてデモクラシイに對する深刻なる疑惑、あらはなる挑戦がこの時代に於て到る所に擡頭したのであつて、先づ第一にロシアにボルシェヴィキの革命が勃發し、續いてイタリア、ドイツに於て議會制度を正面から否定する政治形態が打ち立てられ、日本に於ても一時國民思潮を支配するかに見えたデモクラシイ、自由主義の思想に對する大なる反動が勃興し、一部政治家の唱へたる議會中心政治は今強く否認せられて、三千年來の日本國體原理たる全體主義が急速に復活しつつある。デモクラシイを以て、

政治の最高理想と信ずる人々から見れば今日の世界は正に逆轉時代である。學者思想家がこの風潮を慨嘆しデモクラシイの擁護を叫ぶは固より勝手であるが、一國の國是として單に自國の政治組織を極力擁護するに止まらず、進んで同一の政治組織を有する他の諸國と協力して、異なる政治體系の諸國に向つて挑戦するが如き態度を執ることは、既に混沌たる今日の世界を更に紛亂の渦中に投ずるものと云はなければならぬ。所謂全體主義乃至ファッシヨの代表國家たる獨伊兩國の指導者等は、夙にその國家體制を以て輸出向のものに非ずと宣言してゐるのであるが、之に反してモスクワの共産黨は世界の共産革命を企圖してゐることは周知の通りである。然るに今もしデモクラシイの本家本元を以て任ずる米國がモスクワの態度に倣はんとするならば、世界平和の爲めに洵に遺憾とすべきではあるまいか。

今日ファッシヨ主義の政治形態に對する世上の非難は、主としてこれに屬する諸國が個人の自由を完全に制壓する獨裁政治の下に置かれてゐる點にあり、そして又これらの諸國が擧つて所謂持たざる國として、世界の現狀に對し絶大の不滿を有し、

如何にもしてこの現状を打開せんと努力してゐる點にあると思ふが、この兩點に關し世人は今少しく冷靜に吟味を加へる必要がないだらうか。ドイツに於てもイタリヤに於ても、ヒットラー、ムッソリーニは如何に不世出の偉人であるとしても、兩國の國家組織の重點は彼等個人の獨裁といふことにあるのではなくして、彼等の抱懐する政治理論に在るのであつて、これが偶々國民大多數の共鳴を博してゐるといふのが寧ろ真相ではあるまいか。手近の一例を取つて見ても、先年ライオンランドにドイツが兵を進めるに當つて、國民投票に之を問うたのであつたが、その時の賛成投票は九十九%近くに達してゐるのであつて、國柄に照し多分に之を割引して視ても、之を例へば歴史上、最大多數の投票を得たと云はれるルーズヴェルト氏自身の過般の選舉に比しても、國民信賴の程度に於て同日の談でない。況んや、英國の現政府の得たる票數の如きは問題にならぬ。凡そ政治家が果して國民をその背後に有するか否かといふことは、單に政治の形式如何に依つて判斷し得るものではない。平時に於ける獨伊兩國の實際政治に於ても、ヒットラー、ムッソリーニ兩氏が各般

の政策につき國民大多數の信賴を得てゐる事は否む事が出來ないのであつて、到底往時の封建專制君主の政治とは同視すべくもないのである。事實の問題としては所謂デモクラシーの諸國に於ては常に國民の一半は明かに反對黨であり、諸般の政策の決定が必ずしも國民多數の意思に依つてなされてゐるとは認められないのである。他により善き方法がないから、次善を以て満足するといふ謂はば便宜主義がデモクラシー政治の骨子ではないか。大切な事は要するに國家體制、政治形式の根柢をなす理念であるが、デモクラシーとファッシズムとを區分する主なる點は、國家社會に於ける個人の地位を如何に見るかの問題である。デモクラシー國家に於ては個人は萬能であり、各個人は、例へば各々独自の根柢を大地に張つてゐるところの樹木の如きものであつて、個人と個人との間及び個人と全體との間に實は何等有機的關係を認めないのである。個人は全體と對立の關係に在り、全體の利益の爲めに個人の自由を制限するといふことは觀念としてはヘレシイ(異端)に屬する。政府は所謂必要なる害惡にして、理想としては無政府でなければならぬ。全體主義の哲學は

之に反し、國家或は民族全體は一個の大樹であつて、個人はその枝であり葉である。勿論枝も葉もそれぞれ独自の機能を發揮し、統一ある全體中に立派にその存立の意義は持つてゐるのであるが、全體を離れてはその存在は無く、全體の爲に必要とあれば常に甘んじて自己を滅却せねばならぬ。これは獨伊の新國家原理であつて、同時にこれが三千年來日本の國體の根本原理である。獨伊に於ても今後個々の政治家の運命とは別に、この國家原理は恐らく滅びないであらうと思はれるが、我が日本に於ては國家肇められて以來これ以外の原理は無かつたのであつて、外來思想との接觸等に依り時に政治の外形に變化はあつたのであるが、この全體主義的國家原理、一口に國體と日本人の稱ふるところのものは、天地と共に永久不變であるといふことが、日本國民の感情であり信念である。外部から如何なる壓迫が加はらうと非難を受けようと、この國民的信念には微動だもあるべきものではないのである。

恐らく全體主義に對するデモクラシイ諸國の非難はこの政治哲學の見地から出發する以上に、寧ろファッショ諸國が物を持たざること、従つて彼等が採用すること

を餘儀なくせられる膨脹政策、現状打破の傾向を恐れ憎むが故ではあるまいか。この點から見ても、併し乍ら、ファッショ諸國に對する世上の非難は果して正當であらうか。識者は公平にこの問題を検討して謬りなき判断を下さなければならぬ。今後の世界の平和はルーズヴェルト大統領のいふが如くデモクラシイの普及にあるのでなくして、デモクラシイ諸國が如何にファッシズムを了解し如何にファッショ諸國の政策を視るかに懸つてゐるのである。全體主義國家中の三大國たる日獨伊は防共協定を結んでゐるのであるが、この協定は三國政府により既に幾度も聲明せられたる通り、世界共產革命を企圖するコミンテルンに對する共同防衛を約したものであつて、若し共產主義の人類文化を破壊する勢力が地上に影を潛むるならば、その瞬間に於て三國協定はその存立の目標を失ふべきである。いふまでもなく日獨伊三國はデモクラシイ諸國に向つて共同戦線を張るといふが如き意思は持たないのである。ただ偶然にも三國とも物質的の條件に恵まれぬため、凡ゆる正當なる手段を盡して外部に向つて民族發展の機會を掴まんと努力するが故に、持てる諸國が之に危

惧を感ずるは必ずしも理由がないではないが、デモクラシー諸國が現に自己に對して何等攻撃を受けず又その危険もなきに拘はらず一定の成心に基いて事毎に持たざる諸國の眞意を悪解し、之に壓迫を加へんとするの態度を取るは誠に了解に苦しむ所であつて、斯かる態度は持たざる諸國を驅つていやでも自衛上、本來の防共の範圍を越えて一般的の合作協力にまで赴く事を餘儀なからしむるものではあるまいか。由來物を持たざる者は惡事を犯す可能性が多いと考へるのは、物を持つた者の陥る通弊であるが、事實は必ずしも然らざることは、各國内に於ける事象を見ても分る。物持ちは偽善を裝ひ法律を潛り世人の視聽を瞞着して、實際には極めて憎むべき罪惡を犯しながら何等制裁を受けず、之に反し正直なる貧乏人は彼のジャン・バルジャンの如く、家族の生命を繋ぐが爲めの一片のパンを取つたが故に、一生日蔭者となるといふが如き事例は今日の社會に多々之を見るのである。

國家關係に就て見ても領土廣く物資足り此の上何等求むる所なき大國は、彼等が如何にしてこの羨むべき地位を得たるかを反省することなく、領土狹小にして資源乏しく而も中に燃ゆるが如き生活力とはち切れんとする膨脹力とを藏する諸國民が營々としてその民族發展の機會を作らんとする努力に對して之を白眼視し、動もすれば之を侵略者と呼び、彼等の正當なる發展をも阻止せんとしてゐるのである。國際的物持ちは多くの點に於て國內的の物持ちと同様に振舞ふ。例へば大國は財力を有するが故にその大なる軍備は善であり、貧乏國が無理工面をして軍備を整ふるは罪惡であり、その目的は不純であるといふ。他を批評し裁判するは彼等の特權であつて、弱小國未開國を援助し啓發するは彼等のみ之を能くし、持たざる國が斯かる聖業に手を出すは冒瀆であり自利以外の何物でもあり得ないといふ。持たざる國が曾ての無力の爲め又は無分別より一度調印したる條約は、神聖不可侵として永久に之が尊重を強ひ、その約束履行を迫るに苛酷なること一斤の胸の肉を強要して止まざるシャイロックの姿を彷彿せしむるものがある。國內の多くの不滿不和が持てる者の横暴なる態度に胚胎する如く、國際間の不安も亦然りである。持てる諸國がその持てるものを永く持ち続けんとするならば、今少しく謙虛なる態度を取る事が要

求されなければならぬ。彼等が國際正義を論ずるに當り、單に形式的の定規を以てせんとするが如きは、決して世界の平和を齎す所以ではない。何よりも先づ所謂持たざる諸國の國情、その國民的理想・信念、その周圍の情勢といふやうなものを、今少しく親切に研究もし吟味もして、彼等の行動を輕々しく批判することを差控へなければならぬ。持てる諸國がその地位に大なる減損を蒙ることなく、而も持たざる優秀民族をして各々その所を得せしむることは可能でなければならぬ。

この地球は人類の爲に與へられたものである。人類の運命を支配する目に見えぬ大きな力の存在を信ずる者に取りては、地球上の凡ゆる人類が各々その天賦の生命を満足に發展せしむるに足るだけの方便が與へられて居らぬとは考へ得ぬ筈である。

何れの點より見るもデモクラシイ諸國に對する眞の脅威は決して所謂ファッショ諸國から必然に來るものではあり得ない。デモクラシイに取り専制主義が最大の敵であつた時代は遠く過ぎた。今日世界の何れの部分にも昔時の封建制度の如きものは見られない。そしてルイ十四世やキング・ジョージ四世と共にシーザーやナポレ

オンの再現も亦考へられない。アメリカ獨立やフランス革命當時の幽靈を今日喚び醒まして民衆を警告するのは如何にしても時代後れである。デモクラシイに取つては今日眞に恐るべく警戒すべきは共產主義的獨裁政治である。一昨年モスクワのコミンテルン大會が各國に於ける自由主義者、民主主義者に呼びかけ彼等と協力して人民戦線を作るべきことを慫慂せるは世人周知の通りであるが、之こそ眞にデモクラシイの前途に關心を持つ者の深く反省すべきことである。ボルシェヴィキは誰れが己れの敵であり誰れが味方であるかに就ては、一種無氣味なる超人間的な敏感さを持つて居る。彼等はファッショ打倒のスローガンを高唱する。何となればファッショこそは彼等の思想の基調をなす唯物主義の哲學と根本的に相容れざる原理を標榜するからである。之に反しデモクラシイの思想はそれが彼等の排斥する資本主義の形態を取る場合に於ても、本來、同一人生觀に根據するものである。唯物史觀、個人主義、階級闘争は兩者に共通せる根本的理念である。抑々この世界を個人主義的、唯物史觀的に見るならばカール・マルクスの主張は甚だ抗し難いものを多分に

含んでゐることを忘れてはいけぬ。今日、民主主義を謳歌し自由主義を標榜する多数の國が、事實に於て日に月に左傾しつつあることは否むべからざる所であつて、彼等にして早きに及んで、最近十數年來、異常の進歩を遂げたる自然科学の示す所に従ひて唯物的の人生觀を一擲し、新しき時代の哲學に歸依するに非ざれば、彼等の社會の共產化は蓋し時の問題であらう。現状に戀々たる多数の人々の樂觀に拘はらず、今日の世界は最早や舊來の自由主義や民主主義では間に合はなくなつたのである。單に民衆の物質的福祉といふ如き卑近なる物指しで計つても、今日失業者の最も多いのは米國を初めとし所謂民主主義的の諸國であり、之等の諸國がその無盡藏の資源を擁しながら、國內の社會經濟上の状態が決して誇るべきものでないことは、彼等の政治形態を謳歌する前に識者の深く反省すべき事柄ではあるまいか。萬物流轉して一瞬も休まぬこの世界に於て、一つの政治形式、一つの經濟組織が何時までも萬能藥としてその力を發揮するものと考へるのは、餘りにも宇宙の眞理を無視し人類の歴史を顧みないものではあるまいか。今や世界は二つに一つを選ばねば

ならぬ。共產主義かファッシズムの全體主義か、或は少くもその何れかとの妥協を必然的に求められて居る。

日本の國體と、日本に依つてその最高峯を代表せられる東洋文化の思想とは、全體主義の宇宙觀と多分に一致する。従つて日本に關する限り、新しき選擇の問題ではなくして本來の自己への復歸に過ぎない。ドイツ、イタリアが政治理論として全體主義を新しく造り出したことは今世紀の驚異でなければならぬ。思想の系統を辿れば東洋古來の哲學から脈を引いて居りはせぬかと思はれるのであるが、それは兎も角として、東洋の我々の頭を數千年の永きに互りて支配し來つた思想が西洋の近代國家の體制に具體化されたことは、東洋人としては誠に愉快に感ぜざるを得ない。之に反し、民主主義の深く根を下ろせる諸國に於ては、寧ろ共產主義が一般に對して魅力を有する。従つて人民戰線は今後當分益々發展の一路を辿り、世界は直ちに共產主義とファッシズムの對立まで到らずして、共產主義がデモクラシイと抱き合つて人民戰線の形に於てファッシズムと對立する時代が相當の期間續くものと思は

れる。英米人は彼等の國家を以て人民戦線に屬すといへば強く之を否定し、彼等程ボルシェヴィキを憎むものなく、彼等程共産化の危険少なき國家はないといふであらう。目前の事實の表面丈けを視てはいけない。その政治の原理を深く掘り下げて考へ、現在に於ける彼等の政治の實質及び社會生活の傾向を考察するならば、これらの國々の將來を卜することはさまで困難ではない筈だ。英米の識者階級、殊に天理人道に反する共産主義の害悪を知る人々の深甚なる考慮を求むる所以である。

(皇紀二千五百九十八年三月「コンテムポラリー・ジャパン」所載)

日本の使命

舊い日本——サムライ、歌麿、詩繪の日本に對しては、西洋は常に興味半分ではあるが好意を寄せて來た。京都や奈良の靜寂にして神祕的な雰圍氣に反映される昔の日本の姿に憧れる人は海外にも澤山見られる。日本の味方のみならず、敵意を持つ者も一樣にこの古代日本が保存せられ又は復活することを願つてゐる。「色々古い物、盡きぬ喜びの泉ともなるべきほんたうに美しい物が、近代主義の祭壇に惜し氣もなく捧げられるのは、何と残念な事か」と云つた様な嘆聲は、日本を訪れる外國人の口から屢々洩れるのである。

今日までは、斯うした批評に日本人は耳を傾けなかつた。西洋から學ぶ事に忙がしく、西洋の作るものを作り、西洋の考へる事を考へ、西洋の過ちをまで真似る事

に取紛れ他を顧みる暇もなかつたのである。そしてまた何と物覚えの好い弟子であつたらう。今日の日本は歐米の何れの國にも劣らぬ近代國家である。その工業は世界到る所の市場を風靡し、七千萬の人口をこの島で養つてゐる。世界で三番目の大海軍と大商船隊を誇つてゐる。ペリーの黒船に度膽を抜かれて以來僅か七十餘年にして、この成功を遂げたのである。斯うして、脇目も振らず殆んど盲目的に西洋の足跡を追つて、前代未聞の物質的進歩は遂げたものの、さて止まつて考へる時が來た。この謂はば氣違ひじみた奮闘努力は抑々何の爲めか。結果は何を齎したか。お手本の西洋は何うなつてゐるか。之が心願こめても望ましい大團圓であらうか。かうした省察をせねばならぬ時が來た。

滿洲問題の結果、日本の外交關係が難かしくなつた事と、昨今到る所で日本の商品に不當の制限が加へられてゐるといふ様なことも、日本人のこの内省的氣分を昂めたには違ひない。併し現に津々浦々にまで見られる、日本よ再び醒めよの風潮は、これ等一時の原因に依るものではない。一見日本に於ても西洋に於けると同じ力が

働いてゐる。即ち資本主義的自由主義が日本國民の生活の上に持ち來した一切の弊を是正せんとする運動である。歐米の社會的政治的運動とその點は共通である。併し、これは國民運動であつて、階級闘争ではない。社會主義や共產主義のアヂテーシヨンは根本的に違ふ。のみならず、西洋の社會運動とは違つて日本のは「物」に對する「心」の憤起である。東洋の人生觀は、根柢に於て精神主義的である。表面は兎も角、日本人の「心」は未だ西洋化されてはゐない。なる程外部からの脅威の下に心ならずも西洋夷狄の方法を採用して侵略を防ぐを餘儀なくされた。萬事を抜きにし、古來の傳統の貴きものを多く犠牲にして、全國民擧つて西洋の尊ぶ文武の技術を練磨した。併し乍らこの絶間なき努力の長年月を通して、日本人は自己を失ひ切りはしなかつた。近代文化の燦然たる裡にも、古來の精神が日本人を把握する力は、依然として甚だ強盛である。

であるから、西洋文明に内在する弱點が、日本に於てもその徵候を顯はし、金と機械の威力が、幾百千年に亙り國民の尊重し來つたところのものを急速に蝕ばみつ

つあるかに見える、殊に唯物的個人主義の産物たる共產主義者その他の狂信者が、日本精神その物の權化に在はず。天皇の御身邊を窺ふものすらあるに至つては、幻滅は立所に來つた。その反動として、西洋文明に對する挑戦となり、「アジアに還れ」のスローガンとなり、第二維新の要求が日増に昂まりつつある事も容易に肯づかれる所である。歴史が繰返しつつあるとも云へる。明治維新の騒がしい時期に於ても、尊皇、倒幕、攘夷などの叫びは空に響き渡つたものであるが、今日の日本に於ても日本精神を強調し、大權干犯者としての政黨を排撃し、そして何よりも強硬外交を主張する各種の冊子は汗牛充棟も管ならずである。

幕府の外交政策が尊皇派の倒幕運動に最良の武器を與へたと同じ様に、今日の新運動も先づ出發點として政黨政府の軟弱外交を攻撃したのである。斯くの如く見てこそ始めて滿洲事變の正しい意味が分るのであり、國民多數が軍の行動を擧つて支持しつつある所以も説明が附くのである。外國方面では關東軍が唯だ國民をずるずる引摺つてゐると思つてゐる。引摺つてゐるのは事實であるが、少數の軍人が九千

萬の國民の鼻を取つて簡単に引摺れるものでない。彼等の行動即ち滿洲事變と云ふものに國民が豫ねて求めて居つた聚合點を見出したればこそである。嵐は永く催して居つたのである。それが遂に爆發を見た。國民は驚いた。併し意外ではなかつた。國民の氣分は瞬時にして結晶して仕舞つた。今正に着手せられたる大事業が如何なる意義を有するかに就ては、國民はただ漠たる觀念しか持たなかつた。併し皆んな「かうなつたら何處までも行らなければならぬ」と云つた。確かに何處までも行り遂げた。滿洲國の建設に依つて所謂滿洲事變は一應けりが附いたと見ねばならぬ。若し滿洲事變が海外で云はれる通り、單に強國に依る弱國の侵略に過ぎぬのであつたら、若しも日本をして事業遂行の爲には天地をも震撼する底のあの大童の活劇を演ぜしめた動機が單なる膨脹欲に過ぎないとしたら、國際關係の嵐が吹き熄んだ今日、滿洲並に日本國內に於て見られる情勢は、何とも説明の仕様がなからう。滿洲に於て、牛耳を執つてゐる者は勿論日本人であるが、この日本人こそ、新興國並にその國民の利益を擁護する事に於て、支那人自身よりも遙かに熱意を示して

ゐるのである。溺れんとする小兒を救つた金持の老人が、とどのつまりは全財産をその兒に譲つたと云ふ話があるが、滿洲國の日本人は、關東州租借地も、南滿鐵道も、皆んな新興國家に委讓して仕舞へと主張してゐるのである。彼等が最も警戒の眼を光らすのは、日本資本の侵略と日本人の火事泥的活躍とである。

他方、内地に於ては政治的、社會的、經濟的不安は一向に鎮まらない。一般に、國家の危機はまだ始まつた許りであると感じてゐる。峠はまだまだこれからだ。國家の政治經濟機構を根本的に建て直さなければ、この暴風は乗り切れぬと云はれてゐる。滿洲に於て、先王の理想政治實現に全力を傾けつつある如く、國內に於ても、皇道に還り一切物質主義文明の弊害を剪除すべしと云ふ事が強く性急に要求されてゐる。して見れば滿洲事變は畢竟革新運動の序曲と看做さなければならぬ。

世界は日本に對して全く無實の罪を着せて來た。即ち、資本的帝國主義の西洋が了解する意味に於ての侵略を以て日本を責めるのであるが、そんな觀念は東洋の哲學に於ては存在しないのである。日本人自身も西洋の筆法を以て自己辯護をして來

たのであるが、内心に於ては、東西の思想及び心の持ち様に越ゆべからざる溝渠の存する限り百の辯明も無用である事は分つてゐる。最善の辯護、最終の勝利は、俯仰天地に恥ぢざるの動機と、終局に於て達せらるべき成果とである事は、當初から感じてゐた所である。尤も、大陸に於ても國內に於ても多少の行き過ぎのあつた事は遺憾としてゐる。そして、まだこの上、色々と困つた事件や場面に打突かる事も覺悟してゐる。併し之等は何れも、日本が經過しつつある新生の悩みであるとして極めて冷靜に之を眺めてゐるのである。

今日の日本の情勢は、頗る複雑であつて、簡単に説明は出來ない。また、國民中の諸分子が、必ずしも一つ心で考へ、同一目標に向つて動いてゐるとも云へない。ただ何人も異論のないのは、盲目的西洋模倣はやめねばならぬ。東洋の思想に基いて、西洋式の唯物的機構に對し、冷靜に慎重に再検討を加へ、從來未だ見ざる新しき文明を作り出さなければならぬと云ふ事である。

今日でも地球上に於て、新しきものと古きものとが、多少とも調和して共に存在

してゐるのは日本丈けである。歐米に於ては、不幸にして、新舊の絶縁は完全に終局的である。またアジアの他の部分は、未だ大體に於て近代文明が浸透してゐない。日本は東西兩文明の合流點と見られて來た。今日、日本の欲する所は、單なる橋渡し又は折衷的の役割ではない。東洋と西洋とが日本に於て合流するのみならず、此處に兩者合一して完全なる一個の新しき文明となり、世界のすみずみまでも光被せしめようと云ふのである。これが新日本の最高使命であると感ぜられてゐる。であるから、新しきを棄て舊きに還れと云つても、西洋に於ける日本の同情者や、國內の急激なる愛國者の欲する程に徹底的な或は過激なことは行はれまいと思はれるが、兎も角、現に日本國內に於て進行しつつある奮闘劇に對し、西洋諸國は今少しく關心を持つべきであらう。光は常に東方より來たではないか。

(皇紀二千五百九十四年、米誌「アトランチック・マンスリー」所載)

大陸政策の世界史的意義

六年前の今日、柳條溝の鐵道爆破に端を發したる滿洲事變は、日本の大陸政策に新しき意義と生命とを與へた。事變は何人も豫想せざりし所であり、國民は思想的にも全く用意がなかつた故に、その一般に與へたる衝動は甚だ深刻なるものがあり、當時囂々として捲き起つた全世界の非難攻撃に對しても、國を擧げての精神的結束を以て之に當る事が出来なかつた。しかのみならず國內に於て思想的には、寧ろ海外の批評を窃かに首肯する者すら尠からず有つたのである。斯くの如き雰圍氣の裡に在りては、事變の外交的處理も亦た必然的に遺憾の點が少くなかつたのは已むを得ざる所であつた。

列國に依つて加へられたる非難は、主として日本の行動を以て條約並に國際公法

に違反するものとなし、平和と人類の福祉とを念とする新時代の思想風潮に逆行するものであるといふに在つた。そして當時にあつては未だ自ら世界の輿論と良心との代表者を以て任じた國際聯盟は、日本の滿洲進出に對して遂に「侵略」の刻印を押したのである。之に對する我方の應酬は、自衛權の一本槍を以て終始し、窮しては東亞の特殊事情に遁れ、支那の非理不法や他國の類似行爲を引合に出し、我が權益の特殊重大性を強調するに過ぎなかつた。之を單に賣言葉に對する買言葉として見ても、餘り精彩あるものでなかつた事は否めない。我が大陸政策の新たなる門出を表徴すべき劃期的事變の記録としては、何としても物足らぬものがある。而して、國內一般は我が事變外交の總評として、「宣傳負け」の結論を以て満足してゐるのであるが、問題をしかく簡單に解する所に根本の誤謬があるのであるまいか。之を單に外交技術とか損得打算の上から觀察し、殊にその後に於ける國際情勢の推移に照して評價すれば、滿洲事變の始末は必しも失敗ではない。海外に於ては、我が外交を目して心憎きまで成功したと評する向が寧ろ多いのである。我々が滿洲事變

の經過に嫌^{きら}たらざるは斯くの如き卑近なる見地から云ふのではない。事變の意義本質に關し、國民多數殊に識者階級の認識が甚だ低調であり卑俗であり、大陸政策なるものに就て何等高遠なる理想も哲學も持ち合せなかつた事に存するのである。

滿洲事變と時を同じうして、國內に新しき思想運動の起つた事は周知の如くであるが、全世界を向ふに廻し孤軍奮闘の苦境に置かれながら内に國民思想の大動搖を來し、幾度か不祥事をさへ見たのは、如何にも日本らしくない事象であつて、世人がこの事態を非常時と稱したのは尤もである。併し乍ら、大陸に於ける軍事行動と、國內の思想運動とは一見、彼此關連なきが如くにして實は同一現象の表裏に過ぎない事が漸く明瞭になつて來た。大陸の活動は單なる征服行爲ではなく、一定の理想を持ち、目的を自覺せる行動である事が分つた。それはアジアの諸民族を糾合して、滿蒙の地に王道樂土を實現する事であつた。國內の思想運動は、之に反し頗る統一を缺き、その主張も區々であり聊か明確でない點もあるが、大體に於て大陸の運動に即應し、内は一君萬民の國體を明徴にして、天皇政治の確立を期し、外はアジア

の諸民族を列ね、自らその盟主として東洋傳來の倫理道德に基き共存共榮の理想的國際關係の範を世界に垂れんとするに在る、といふ事が出来るのである。

而して此の内外兩面の運動を是認し或は之に携はる者を呼ぶに世間はファッショの名を以てしてゐる。名稱の當否は別として、個人主義を排して全體主義を強調し、共產主義乃至デモクラシイの如き唯物史觀的な思想系統を排撃する點に於て、イタリア、ドイツの新國家觀と一脈相通するものある事は肯定される。ただ日本の運動の特徴は、萬邦無比の我が國體に力點を置く事と、英米追隨を極力排斥する事に在る。此の意味に於て明治維新の場合に於ける尊皇攘夷を想起せしむるものがあり、新運動の口火が先づ滿洲事變なる涉外問題に切られたのも偶然ではない。由來一つ思想運動が全民族の心を捉へるまでの力となるが爲には、必ずや深き根柢があり、遠き淵源がなければならぬのであつて、單に時の政府の外交の軟弱と云ふが如き寧ろ第二義に屬する具體的事實にその原因を求むるは當を得ないのであるが、日本の國民性として外交の問題は人心に入り易く興奮を煽るに適してゐるが故に、所謂軟

弱外交の打倒が叫ばれ、英米追隨策の排斥となつて現はれたのである。

然るに滿洲事變の嵐が吹き止み、冷靜が取り戻されると共に、英米排斥の叫びは自らその意義に變化を生じた。始めは主として外交を目標とし、従つて個々の外國を對象としたものが、今や一變して國內に於ける外國的なもの、非日本的なものに向けられるに至つた。攻撃の目的が外交から内政に移つたとも言ひ得るのであつて、要するに思想運動たる本來の面目に還つたのである。もともと革新運動の本質は、半世紀餘の永きに亙り、無反省なる歐米崇拜を事として居つた日本民族が、卒然として長夜の夢から醒めて、本來の自己を發見したといふ事に在るのであつて、それが外に向つては滿洲事變となり、内に在つては日本主義運動となり、内外を通じて「アジアに還れ」の叫びとなり、大アジア建設の要求となつたのである。

鋒芒が外に向つてゐる限り、國論の統一は比較的容易であつたが、一度問題が國內的となるに及んでは忽ちにしてそこに利害の衝突を呼び、思想の相剋を招き、矯激なる言動は苛烈なる彈壓となり、紛然雜然底止する所なき事態を惹起したのは已

むを得ない所である。元來國家の改造とか政治の革新とかいふ事は、一朝一夕にして成就せらるべきものではなく、急激に之を達成せんと試みる時は、必ず火花を散らし破壊を伴はなければならぬ。平和の時代ならば知らず、現下の國際非常時に當りては、所謂革新陣營の人々に對して多分に自制自重が要求せられる所以であるが、同時に對外關係の急迫は現状維持派に對しても大なる犠牲を餘儀なからしむるが故に、政治經濟の重大なる缺陷は此際一應は矯正を見るものと思はれる。さりながら、非常時を理由とし、國際危機に藉口して、思想の運動まで制壓し、相剋對立に無意味なる妥協を強ひてはならない。むしろ反對に、時艱の克服は先づ國民思想の動員を必要とし、之が爲めには何よりも旗幟を鮮明にしなければならぬ。相剋解消に急なる餘り愛國心の名に於て國民思想の萎縮を招來するが如きは我々の最も與せざる所である。況んや、革新勢力の思想傾向こそは、今日の時局を豫想し、之が匡救を企圖するものなるが故に、此際その努力を倍加して國內思想戰線統一の大業を完成せしめなければならぬ。

抑々西洋の物質萬能主義を清算して、東洋文化の粹を代表し、その最高峯を示す日本精神への還元を要求する運動が、根本に於て正しき事は何人も否定し得ないであらう。個人主義物質主義に基礎を置く文明が今日既に行き詰まつてゐる事は、西洋に於ても識者の等しく認むる所であり、之が打開の鍵を東洋古來の文化思想に索めんとするの運動が彼地に於ても一部に擡頭してゐる程である。殊に最近代に於て飛躍的發達を遂げつつある自然科学は、從來の機械的宇宙觀を根柢より覆し、物質不滅の原則に重大なる修正を加へ、非科學的として顧みられなかつた東洋の神祕主義は、却つて最新學說によつて裏書されんとして居り、唯物史觀的の物の見方は今や理論としても完全に破産してゐるのである。更に又、政治の學說並びに實際に於ても、一世を風靡した自由主義、デモクラシーの如き個人を基調とする思想は、今日漸く時世に取殘され、國家主義的、民族主義的の傾向は、不可抗の力を以て前進を續け、明日の政治哲學は、全體主義の獨舞臺たらんとしてゐるではないか。斯くの如く、西洋に於ても既に新しき時代の黎明を迎へつつあるに方り、獨り日本に於

て何故に識者がその舊套を脱ぎ棄てる事をしかく躊躇するのであるか。國內の思想戦線が膠着状態に陥り、一步も前進せざるに反し、大陸政策のみが跛行的に募進しつつあるのが現前の事實であつて、之は日本國民として喜ぶべき事ではなく又誇るべき現象では尙更ない。

滿洲事變に際しては、日本が無準備であり、無自覺であつたが爲めに、理論闘争に於ては、西洋流の法律論や利己的なる人道論、安價なる平和論に對してさへも、聊かたじたじの氣味であつた事は前に述べた通りである。然るに暴風一過と共に、國民はこの苦杯を忘れたものの如く、六年の歲月は殆ど無意味に流れた。そして北支の風雲急を告げ、遂に武力に訴ふるに方つて、我が朝野の言説は自衛權とか、特殊權益とか、依然たる霸道的シヤルゴン（譯言）の範圍を出でず、問題が上海に波及し、日支の全面的衝突となるに及んでは、暴支膺懲を叫んでゐる。又歐米の新聞雜誌が、例に依つて例の如き非難を我に加ふるを見ては、あわてて特使を派遣するのだといふ。六年前に比して聊かも進境を示して居らぬ様に思はれる。一體日本の大

陸に於ける行動を、西洋流世界觀の埒内で辯明せんとするのが間違である。法律論や條約論を以て辻褄を合せようとする所に無理がある。西洋の物の見方に従ふならば、西洋の規則を守らなければならぬ。西洋の輿論が擧つて非難する事は悪い事として承服しなければならぬ。之は滿洲事變に於て、すでに經驗した所であつて、當時日本は聯盟を脱退するに際し、平和に關する所見を異にすと宣言して、決然西洋と袂を分つたのである。今にして何を苦しんで再び西洋に降参し、西洋の輿論に屈服せんとするのか。内に毅然たる信念なく俯仰天地に恥ぢざるの自覺がないからではないか。抑々我が大陸政策はその本質に於ては文化史的使命を持つもので、人類社會改造の企圖であり、現代文明の行詰りを打開せんが爲めの一念發起であつて、幾多歴史に現はれたる一見類似の事例とは比較すべくもないのである。例へば朝鮮の治績に就て之を見ても、他國の植民史上には斯くの如き淡泊にして無私なる統治の實例はない。滿洲國は創立僅か五年にして、世上一切の惡意ある豫言を裏切つて、既に着々として王道樂土の實を擧げつつある。更に北支の各地に於ても、現に皇軍

到る所、住民所在に簞食壺漿して之を迎へ古聖賢の言を事實に證明してゐるではないか。蓋し我が建國の理想と大和民族の國民性とは、冥々の裡に日本の國家的活動の原動力となり指導力となるが故に、日本の動く所、結果は必ず八紘一字の大理想と合致するのである。國民はこの事實に目覺めなければならぬ。徒らに外國の批判を恐るる勿れ。恐るべきは自己の良心である。自己の行動に確信を持ち得ない事である。

斯く云へばとて、我々は決して徒らなる獨善主義に墮せんとする者ではない。列國との國交を輕んじ、條約も法律も無視して可なりと云ふものでは素よりない。問題は併し乍ら、そんなちつぽけなものではない。今や支那南北の戦線に於て、アジアの同胞は死力を盡し、血みどろの闘争を續けて居る。抑々何の爲めの戦争か、領土の爲めでも征服のためでもない。又支那國民に對する憎しみからでは勿論ない。貴重なる皇軍將士の生命を幾千となく犠牲に供し巨億の國帑を費して、戦勝つも之を償ふべき實利は元より期待されぬ又實際期待して居らぬ。斯くの如き戦争の前例

が何處にあつたか。功利主義の西洋が日本の眞意を解し兼ね、戦争の目的を了解し得ないのは寧ろ當然である。何人と雖も、日本建國の大理想を解せずしては此の疑問に對して満足なる回答を與へる事は出來ないのである。思ふに、今次の事變は日本が民族的勇猛心を振ひ起して前代未聞の自己滅却を敢てし東亞の再建に乗り出したものであつて、人類の文明と歴史の全動向とは今正に一大轉機に臨んで居るのである。世界は須らく此の事實を直視すべきではあるまいか。

(皇紀二千五百九十七年、十月號改造所載)

眞日本の外交

従來の日本の外交はその國力に應じて、常に受身であつた。どうしてこの國を守るかといふ事が眼目であつた。日清戦争でも日露戦争でも大體目的は消極的であつた。然るに滿洲事變以來、従來の消極主義は一擲され、今度は日本の存立といふ事はもう問題でなく、廣くアジアの諸民族を救済するといふところまで日本の外交の目標は擴大されて來た。今現に支那と戦つてゐるけれども、實は相手は支那ではない。それはその背後にあつて支那を操り、支那を踊らしてゐる勢力と戦つてゐるわけである。即ち、外部の勢力に對して支那を守るが爲の戦争である。日露戦争は主として日本自身を守る爲であつたが、今度の戦争は支那人と打合つてはゐるものの、眞の目的は支那を守るに在る。日本の戦争の相手は支那の民衆ではない、日本の目

ざす所は日支の提携だといふ事を政府も聲明して居るが、それを非外交的に、もつと露骨に言へば、支那の背後にある勢力を打つのが日本の目的であるといふことになる。斯う言へば西洋にも判り、日本人にももつと判りいいと思ふ。現にじやんじやん打合つてゐながら目的は提携だと言ふものだから、西洋人は判らないと言ふ。例へば經濟的に政治的に支那を操り、支那を搾取してゐる勢力、或は思想的に支那を混亂に陥れてゐる勢力を打つのだと斯う言へば非常によく判る。そしてそれが實際今度の支那事變の真相である。従つて此の事變は、唯支那を負かした、南京政府及び國民黨一味の人達を膺懲した、或は降服させたといふ事だけでは濟んでゐないわけである。これは、ほんの背後の影武者に操られてをつた勢力を打破つただけなのだから、これでは戦争の目的は達せられない。であるからして、南京を取つて更に漢口まで行くか或は廣東まで行くかといふやうな事は、それ自身餘り大きな意味は持たない。背後の勢力が其儘である限り、例へば廣東迄行つても日本が引上げた後に禍根が残つてゐるとすれば、直ぐ復た新しい芽生えを見るであらう。徹底的に

日本の目的を達する爲には、どうしてもさういふ外界の勢力を完全に東洋から驅逐して仕舞ふか、それでなければ彼等をして従來の態度を改めしめ政策を一變せしめ、アジアの再建設に對して日本と協力せしめるところまで行かなければ、問題の終極的解決は出來ないわけである。従つて戦争だけでは必ずしもこの目的は達せられない。それは例へばロシアが兵力を以て日本に對抗し、支那に於て何方が指導的立場を占めるかといふ事を争つて來れば、兵力に依つて解決するよりない。併しさういふ風に露骨に兵力だけでなく目に見えない力を持つて來れば戦争ではけりはつかない。其處に日本の外交が非常に重要な役割を演じなければならぬ廣い範圍があるわけである。であるからして、この事變の始末及び其後に於ける日本の外交は、その根本の原理、理想といふものからしてはつきりと決め、單に外交當局だけでなく國民全體が之を把握してこの根本方針に基いて外交を進めて行かなければならぬ。昨今皇道外交といふやうな言葉を耳にする、或は大乗的外交とも言はれる。要は、従來の西洋諸國の執つて來たやうな、自分の發展の爲、自分の利益の爲に他を侵す

領土を獲得する、勢力範圍を擴める、といふやうな外交でなく、自他共に利益する、即ち己を救ひ他を救ふといふ外交をいふのであらう。之を實際に徴して、日本の國民性は、さういふ發展の仕方にもよく適してゐるのであつて、従來でも臺灣とか朝鮮とか近くは滿洲國といふやうな地域に多數の異民族があるわけであるが、是等に對する日本のやり方は、従來、他の國他の民族他の國民が行つた所と根本的に違つてゐるのであつて、今後日本が益々大陸に伸びて行くといふ事は、日本人よりも寧ろ其の地方の住民の安寧福祉に、よく貢獻する結果を來す事は疑ない。従來、國民は必ずしもそれを自覺して居らなかつたかも知れない。現に臺灣の統治のやり方が餘りにお目出度い、あれではまるで支那人の爲にやつてゐるやうだ、といふ聲を聞くし、朝鮮でも、すつかり甘やかして馬鹿な政治をしたといふ者もある。併しこれは政府の政策の善い悪いといふ問題でなく、日本の國民性で欲すると欲せざるとを問はずさういふ結果にならざるを得なかつたので、之れが日本國民の偉大なる事の證據であると思ふ。今度の事變でも色々と支那に對して物質的注文をつけ、北支

の資源であるとか、或は揚子江の流域其他の地方に於て日本が特別優越な地歩を獲得せねばならぬといふ事を随分主張する者もある。政府の國策としては或は斯ういふ主張に對して全然耳を掩ふ事は出来ないかも知れぬ。事變で巨億の國帑と幾千萬將卒の尊い生命を犠牲にしたのであるから、餘りにお人好しの愛他的な理想主義的解決では國民が納得せぬ、といふ虞も多分にあるからして、外國が日本の支那に對する政策を侵略的、軍國的であると言つてゐる此の非難に多少の口實を與へる結果になりはせぬかといふ事も心配されるわけであるが、併し他面、國內に於て軍部も政治家も一般思想界も、國民の指導的立場を占める人達の氣持は大體に於て所謂皇道外交、大乘外交の要求と合致してゐるやうに思へるのであつて、この事變の結果として單に日支間の融和親善が促進されるだけではなく、又單に日本の經濟上の地位が向上し、東亞に於ける日本の政治的の立場が最早や何人の挑戦をも許さぬ程度にまで高まつて行く事は問題ないが、それにも増して、支那の民衆の幸福安寧が必然飛躍的に増進されるであらう事は疑ない所である。革命以來二十六年、支那の民

衆は曾て正しい政治といふものを知らぬ。少數の軍閥政治家が國土人民を私して、名狀すべからざる腐敗墮落の政治をやつて來た。此の慘澹たる狀況が此の事變に依つて一掃され戰爭の破壊の後に新しい支那が生れるといふ事は殆んど疑ふ餘地がないのであつて、さうなつてこそ始めて此の戰爭に生命を失つた幾萬の日支人の犠牲が無意味でなかつたといふ事になり、又さうなつてこそ始めて外國も日本の大陸政策なるものが單に之を物質的に見てもさう非難すべきものでないといふ事が判つて來ると思ふ。更に之を一段高い立場から見ると、此の支那事變の解決如何に依つては、從來の西洋人の考へて居たやうな國際關係に關する原理並に哲學が根本的に革新されるといふ事になりはせぬかと考へられる。例へば此の事變の後恐らく支那には將來軍備を持たせぬといふ事になりはせぬか、又さうすべきものだと思ふが、若しさうなれば、支那は國防力を有たざる國家になるわけである。極く小さな國なら兎も角、四億以上の人口を有つたあれだけの大國が國防を有たぬといふ事は殆んど歴史に例を見る事の出来ない大きな事實であると思ふ。さうして其の隣に日本とい

ふものが精銳なる陸海軍を有つて居り、而も此の無力なる支那と此の有力なる日本とが相隣接してお互に寸毫も侵さない、そして兩國の間に特別に條約を作らんでも若し外部の勢力が此の無力な支那を侵す場合には日本は立所に起つて之を防ぎ排撃する、而も國際法に所謂保護國關係、或は從屬關係といふやうなものでないといふ事であつたら、これを在來の國際法は何と説明するか、西洋の觀念では殆んど説明が出来ないであらう。これはどうしても古來傳統の東洋精神、東方の哲學並に倫理道德の根本觀念から説かなければ判らない。若しさういふ望ましい事態が現實になつて來るといふ事になつたら、これは世界人類に對する大きな教訓ではなからうか。皇道と云ひ日本建國の理想といふも、斯ういふ具體的の事實に依つて世界人類に示すのが近道であり、適切ではなからうか。さういふ風に見て來ると今度の事變といふものが非常に意義を有つて來るわけである。世界史的に見て是が一つの大きなエポックを作るといふ事になるから、國民も此の事變のさういふ大乘的の意味を理解するならば、之が爲め多少の犠牲を拂つた事を決して悔まぬだらうし、此の戦争で

戦死した者、傷ついた者は日清日露の役の犠牲者よりも、更に尊い更に大きな目的の爲の犠牲であるといふ事になるわけである。而して目前の利害に捉はれた不平や不満も一掃されるのではなからうか。

我々は日本の大陸政策といふものに、以上言つたやうな廣い大きな意義を認めるのであるが、今度の支那事變も此の見地からすれば、南京が陥落した、支那が屈服した、これで平和が取返される、事態が七月以前の平穩な状態に還る、斯ういふ風に簡單に見る事は出来ない。日本の目的は非常に高遠であるだけにその終極的成功には絶大の努力を必要とする。日本の犠牲的努力は今後も殆んど涯なく續かなければならぬかと思ふ。支那の和平統一といふ事だけでも日本の物質的精神的援助に依らなければ出来ないが、是がなかなかの大事業である。此の爲だけでも今後幾年かに互つて日本國民の大きな努力が要求されるわけである。沉んや曩に言つた支那の陰に踊る諸勢力といふものを或は驅逐し、或は之を諭して態度を改めしめるといふやうな工作には又絶大の勞苦と犠牲が要るわけであつて、而も日本の皇道外交が日

本民族の使命、建國の理想を實現すべき役割を擔つてゐるとするならば、單に支那四億の民衆のみならず自餘のアジアの諸民族をも解放し、救濟するといふ大事業を前途に控へてゐる譯で、日本民族の努力精進は殆んど今後底止する所がないと言はなければならぬ。勿論此の使命達成の爲に常に如何なる國とも必ず戦争に依つて之を解決しなければならぬものではない。併し乍ら斯ういふ大きな國家的理想を實行して行く國民の運命として、時に外部の力との衝突は避け得られない事を覺悟しなければならぬ。そして日本の限られたる物質的資源を以て此の大事業を遂行して行く爲には、國民として所謂臥薪嘗膽の時期が長く繼續するものと腹を決めなければならぬのであつて、國民生活の安定とか、向上とかいふ事を以て國策の基調とする事は勢ひ出來ないのみならず、今後當分さういふ方面の施設は多分に犠牲にされるといふ事を覺悟しなければならぬ。英國の總理大臣も過般議會に於て、國際情勢に照し軍備の大擴張をやらなければならぬ、従つて一切の社會政策的事業は此際放棄する外ないといふ事を言つてゐる。英國の富を以てしてもさうであるならば、日本

の如き物質的條件に於て遙かに恵まれない國に於ては尙更、其の覺悟がなければならぬと思ふ。併し犠牲は勿論國民大衆にばかり強ふべきものでない、各階級何れも公平にその負擔をしなければならぬ。何れにしても當面の戦争が濟めば平和安穩が國民生活に還り來るといふ事は此際考へられない事であり、又國民にさういふ期待を持たせるといふ事は危険である。ナチス獨逸には、クラフト・ドゥルヒ・フロイデといふ標語がある、即ち心の樂しみによつて力を得るといふ事であつて、ドイツ民族の發展向上の歡喜に依つて物質的の艱苦に堪へ精神力を養ふといふ事であるが、日本國民も此際さういふ決心をする必要があるのではないか。日本は貧乏だといふけれども、生活の樂しみを享有する點に於ては、ドイツやイタリアの民族に比べれば遙かに程度が高いのであつて、今後と雖も獨伊兩國民程の苦難に晒されなくて済むと思ふ。日本の如き萬古無比の國體の下に、世界他民族の曾て思ひも及ばなかつたやうな高邁なる理想使命に向つて邁進する國民が、今後も今日程度の苦難に堪へられないといふ事のある筈はないのであつて、要は國民精神の作興といふ事が最も

大事であり、それも單に愛國心や敵愾心をそそるとか、小乘的の犠牲心を涵養するといふ事以上に、今少しく高い平面に於ての國民の自覺喚起といふ事が必要であり、識者は最も此點に想を致すべきではないかと思ふ。

(皇紀二千五百九十七年十一月「大日」所載)

南進に於ける日本の地位

—英雄的時代來る—

本日は杉浦先生を追慕する會でございます。毎々杉浦先生關係の色々な事に携つてをられる方々がお見えになり、なごやかな懷舊談でもなすべき會合で實は時事問題などは少しどうかとも思ふのですが、只今の御挨拶にもありましたやうに、何と申しましても今日は随分内外非常なる時機でございますので、三人寄り五人寄つても直ぐ話題は時局の問題に移る際でございますから、御註文によりまして少しばかり私の考へてゐる所をお話し申上げるのもよろしいかと考へる次第でございます。

杉浦先生には今から四十年近くも前に我々は御教へを受けたのでございますが、先生の我々に對する御教訓は今日の流行言葉で申せば八紘一宇、即ち日本の天皇を世界の天皇におさせ申さなければならぬ、それが日本國民の使命である、とい

ふことが中心思想であつたやうに我々は記憶してをるのでありますが、若い感受性の強い時代にさういふ思想を吹込まれたことは、私と致しましては非常な仕合せなことであつたと、今日までこれを深く感謝してをる次第でございます。

さういふ日本の八紘一宇の理想といふやうなものが今日は將にその實現に向つて大いなる一步を進めんとする時機に際會してゐるのであります。なるほど日本は如何にも内外非常な難局であつて、一般に開關以來の國難に遭遇してゐると謂はれるのであります。無論大和民族が大いなる飛躍を遂げんとする際でありますから、一步誤れば、そこに大なる危険がないとは申し得ないのでございます。さりながら、今日を以て單に日本の國難だ、日本は非常に危険なる時機に際會してゐるといふ見方には私はどうしても賛成することは出來ない。私は、國民さへ、しつかりしてゐれば、實は日本は開關以來最も惠まれたる時代、最も大なる飛躍を遂ぐべき時機に際會してゐるのだと思ふ。

一番、國民が心配するのは、何といつても支那事變を三年半やつて來たので國力が衰へてゐる、そこへ持つて來て、外交の關係が非常に危険であつて、支那で戰爭した擧句、更に今度は又英米と戰爭しなければならぬかも知れない、ロシアといふものも安心出來ない、といふやうなことであります。つまり戰爭による國內物資の不足、國力の疲弊、之に加ふるに對外關係の危険、この二つが結合したのであるから日本は容易ならぬ時機に際會してゐると見るのであります。私は徒らに樂觀することは勿論禁物であると思ひますが、冷靜に考へますと、さうして世界の他の國々の事情をも具さに研究し、日本と比較して考へると、私は必ずしも心配を必要としないと見るのであります。

*

抑々日本の國力の疲弊といふことを誰もが云ふのでありますが、一體支那事變を三年半やつて日本は何が困つたか、何處が弱つたかといふことを考へる。第一に擧げられるのは金がなくなつたといふことである。成程日本は少しばかり金を持つて

ふことが中心思想であつたやうに我々は記憶してをるのでありますが、若い感受性の強い時代にさういふ思想を吹込まれたことは、私と致しましては非常な仕合せなことであつたと、今日までこれを深く感謝してをる次第でございます。

さういふ日本の八紘一字の理想といふやうなものが今日は將にその實現に向つて大いなる一步を進めんとする時機に際會してゐるのであります。なるほど日本は如何にも内外非常な難局であつて、一般に開關以來の國難に遭遇してゐると謂はれるのであります。無論大和民族が大いなる飛躍を遂げんとする際でありますから、一步誤れば、そこに大なる危険がないとは申し得ないのでございます。さりながら、今日を以て單に日本の國難だ、日本は非常に危険なる時機に際會してゐるといふ見方には私はどうしても賛成することは出来ない。私は、國民さへ、しつかりしてゐれば、實は日本は開關以來最も恵まれたる時代、最も大なる飛躍を遂ぐべき時機に際會してゐるのだと思ふ。

一番、國民が心配するのは、何といつても支那事變を三年半やつて來たので國力

が衰へてゐる、そこへ持つて來て、外交の關係が非常に危険であつて、支那で戰爭した擧句、更に今度は又英米と戰爭しなければならぬかも知れない、ロシアといふものも安心出来ない、といふやうなことであります。つまり戰爭による國內物資の不足、國力の疲弊、之に加ふるに對外關係の危険、この二つが結合したのであるから日本は容易ならぬ時機に際會してゐると見るのであります。私は徒らに樂觀することは勿論禁物であると思ひますが、冷靜に考へますと、さうして世界の他の國々の事情をも具さに研究し、日本と比較して考へると、私は必ずしも心配を必要としないと見るのであります。

*

抑々日本の國力の疲弊といふことを誰もが云ふのであります。一體支那事變を三年半やつて日本は何が困つたか、何處が弱つたかといふことを考へる。第一に擧げられるのは金がなくなつたといふことである。成程日本は少しばかり金を持つて

をつた、それが出拂つてしまつた。それから國家の借金が大幅殖えた、甚だ相濟まぬが私は正確には數字も覚えてをりませんが公債は百億とか二百億とか殖えたさうである。さうして年々赤字公債で財政は少しも辻褄が合つてゐない。それから色々な物資が不足して物が手に入らぬ、國民の生活の基礎であるところの米までが足りなくなつて來た、食糧品が足りなくなつて來たといふ事、さうして百萬の皇軍は依然として今日海外に辛苦を嘗めてをる、何時之れが果つべしとも思へない。益々物は要るばかりである。而も生産の擴充は思ふ様に行かぬ、國內には不平がある、國民の顔には疲れた色が見えて來た、失業する者もある、といふやうな色々なことが擧げられるのであります。私も今日の日本の國內政治經濟の状態は決して満足すべきものであるとは言ひません。併し乍ら之は専らやり方が悪いからでせう。人間の業であるから翻然改めさへすれば明日にも善くなる筈ではないですか。今まで政治のやり方がうまくなかつたから斯うなつた、之を變へることは國民の決心次第で出來ることであつて、それをもうどうしてもやつて行けないといふのは諦め主義敗戦

主義であるといふことが出来る。日本の國力の疲弊といふことは見様によつてはである。例へば金がなくなつた。それは併し唯なくなつたのではない。日本の金がなくなつたといふのは、大部分アメリカに行つたからであるが、アメリカに我々は金一匁と雖もただでやつてはゐない。代りの物を持つて來てゐる。その物は支那の戦場で消費されたものもありませうが、多くは何か他の物に代つて今日の日本の力になつてゐる。色々な生産の設備、或は武器、さういふものに形が變つてゐる。金がなくなつたからといつて貧乏になつたといふのは皮相な考へ方であつて、從來の「金」に捉はれた物の見方である。實際において日本の實力となつて多くの物が残つてゐる。借金が殖えたといふことも、成程國家の臺所から見ると大變に借金が殖えたので、今後中々財政はやつて行けないと思ふかも知れない。併し乍らこれは外國に借金したのではない、政府はマイナスであるか知れないが、國民はプラスである。要するに公債が殖えたといふことは、謂はば親が子供に借金してゐると同じである、子供から見れば貯蓄が殖えたのである、之を以て日本の國力が衰へたといふ

ことは、西洋の自由主義的な個人主義的な考へ方である。日本は一つの大家族國家である、天皇を大御親と仰いで國民は凡て兄弟の關係であるとするならば、借金が殖えたといふことは單に財政の技術上のことである。從來の方法では少し財政がやりにくくなつたといふことに過ぎないと、極端にいへば言へる。

*

支那の戰場において現實に消耗した物、これは然らば全然何にもならなかつたか、完全に失はれたかと申しますと、決してさうでない。この三年間に日本が大いなる犠牲を拂つて支那で戦つたといふことは、目に見える物は減つてゐるかも知れないが、目に見えぬ力が倍にも、三倍にもなつてをります。西洋人は事變の初に日本の力といふものを國民所得が何程、生産額がどの位、租税の収入が幾らと一々彼等の標準によつて日本の力を計つて、これはたかだか半年か一年位で日本は參るだらうと言つてをつた。然るに三年半、彼等が期待した如く希望した如く日本は破産しな

い。彼等は日本の目に見えぬ力の大きいのに驚いてをります。この西洋人の考へ及ばない實力を發揮したといふことだけでも、實に大きな收穫であります。日本國民は之によつてどの位自信を得たか。滿洲事變以來の十年間、特に最近三年間の非常時がなかつたならば多年自由主義に毒されて來た日本民族は、精神的に益々廢頽して行つただらうと思ふ。今日國民は一億一心、臣道を實踐するといつて居り、日本の國體に目覺めて來たのは、何としても過去幾年の大きな忍苦犠牲の賜であります。これがなかつたならば、今日のやうに國民の精神作興は出來なかつたらうと思ひます。殊にこの事變の最大の效果といふべきは、從來どうしても日本は英米に依存しなければやつて行けなかつた、アメリカ或はイギリスの植民地から材料を持つて來て國民が汗水垂らして勞力を加へる、さうして出來た物を自ら使ふのでなくて、之を他國に買つて貰つて更にそれで原料を獲得する、それを繰返して來た。謂はば國民はイギリス及びアメリカに使はれる勞働者の如きものであつた、彼等から物を買つて貰はねばならず、賣つて貰はねばならず、どつちを向いても頭が上らなかつ

たのが今までの日本であつた。極端にいへば今まで日本はその意味に於て獨立國でなかつた。然るに支那事變を三年半やつて來た、これは聖戰であるから、日本國民は一切を抛つても之をやり遂げなければならぬといふ大きな決心でやつて來た。之れに對して英米は事毎に邪魔立てした。彼等の敵性といふものは全國民の骨の髓までも浸込んだ。之によつて漸く英米依存がいけないといふことが國民に解つて來た。三年半の戰爭を通して、英米が日本に對して示した敵性といふものがなかつたならば、日本は英米に背き獨伊と協力して世界の新秩序を作るといふ大きな覺悟は出來なかつたであらう。支那事變の努力犠牲といふものは日本がこの大きな踏切りをつけるためにどうしても必要であつた。さういふやうな意味からすれば、我々が三年半に亘つて拂つた犠牲たるや決して無益ではなかつた。今日まで費したところの勞力、金、物、之れらは決して無駄ではなく、最も有意義であつたといふことが言へます。勿論十幾萬の尊い生命が失はれてゐる。これは永久に償ひ得ない損失であります。若し支那事變に本當の損失があつたとするならば、この十幾萬の英靈こそ、

それであると考へるのでありますが、併し乍ら、この英靈たるや 天皇の御爲めの最も尊い犠牲であつて、今日までの結果からしても既に立派に報いられてをります。今後日本がさらに大なる飛躍を遂げんとする踏み臺、人柱となつたのでありますから、日清戰爭、日露戰爭に於ける殉國の英靈に比し、聊かも劣らざる尊い犠牲であります。

*

かう見て來ると、事變によつて日本が弱つたといふことを私は無條件に認めることは出來ない。一部には、事變が意外に永引くのでやや氣を腐らし、どうもやり方がまづかつた、事變は失敗だとさへ言ふものがあります。之は大變な心得違ひであると私は思ふ。それは成程從來の歴史にあり來つたところの戰爭のやうに、速戰即決で日本が領土を取るとか、或は償金を仰せつけるとか、何か目に見えた利益を収める、それがなければ戰爭は成功でないといふやうに見るならば支那事變は成功と

は言へない。併し乍ら初から日本はそんな考へで戦争してゐるのではない。であるからこそ聖戦と呼んで來た譯である。勿論、事變は失敗ではない。聖戦に失敗があつてよからうものではない、有り得るものではない。この事變の責任は誰であるかなどと議會あたりで問題になつて、閣僚がハンカチを目に當てて非常な感傷的な場面を呈したとのことで、一部の新聞は之を美談として書き立てた。外國では之れをどう見るであらう、日本は支那事變收拾がつかなくて、政府も議會も國を擧げて困つてゐると、かう見るであらう。私は支那事變といふものを決してさういふ風に見ない。實は事變は今日において既に大いなる結果を擧げてをり、或る意味に於ては、大體その目的を達したとさへも思ふ。蔣介石が頑張つてゐるといふことは問題ではない。もともと一蔣介石を打倒するといふことが目的ではなかつた。我々が支那事變を戦つて來た目的といふものは他にある。先づ第一に、支那國民を白色人種の搾取から免れしめる、支那を半植民地的状態から解放してやるといふことであつた。無論日本人の感情からいへば支那の從來の排日、侮日は怪しからぬ、どうしても一

度は之を膺懲するといふことも必要であつた。併し乍ら、さういふ感情は既に十二分に充たされてゐる。日本も損失を被つたが、支那の損害といふものは言語に絶するものであります。四億國民が今こそ、日本を侮ることが何を意味するかといふことを嫌といふ程體驗したでせう。最早や支那の膺懲は澤山であります。日本政府が聲明した支那事變解決の綱領といふものは何であるかといへば、日支親善、協同防共、經濟提携、といふやうなことであります。さういふ目的は今日既に容易く達し得る。日本がほんとにそれ丈の條件でよいと云ふならば、蔣介石は明日にでも日支和平の交渉に應ずるであります。經濟提携といふことは、若し正直に日本と支那と共同して支那の資源開發をやるといふのであり、支那を資本主義的に搾取するといふことでないならば、支那も反對せぬであります。協同防共、之も何等支那から見て反對すべき理由はない。實は外國の關係があるから、日本は支那事變の目的として白色人種を支那から驅逐する、支那の半植民地的状態を清算する積りだといふことは政府の聲明には曾て現はれてゐない。併し乍ら、この事變のほんたうの

原因は白色人種の支那操縦である、彼等が支那をして排日をやらしめた、さうして彼等が支那に勢力を持つ限り、事變を如何に結末づけても永久に日支の提携は出来ない。であるから實はこの事變の最大の眼目は白色人種の不當なる活動を支那から一掃する、彼等の不當なる地位を清算するといふことでなければならぬ。

*

それは今日、日本は既に支那だけではない、南進論といふものが國を擧げての輿論でありませう。南進論は平たく言ふならば、アジアの同胞を白人の手から解放するといふことであつて、彼等が自分の領土、植民地として來た地方からも彼等の不當なる地位を取り除かうといふことである。支那から白人を驅逐するといふことは最早既定の事實であつて問題でない。支那事變が如何なるものであるか、日本の目的とするところが何であるかについて、明確に分つてゐないから、三年半経つても重慶が落ちない、事變は長引いて困る、國民は戦争に倦んだ、これは實に爲政者の

責任であるといふ聲が起つて來るのであります。支那事變を失敗と見るならば之はなかなか解決出來ない。「失敗である。」「さうですか。」と引込む日本國民ではない、石に嚙りついても成功させようとする、蔣介石と十年戦争を決意すべしといふものも出て來るわけです。併し乍ら支那を相手に十年も二十年も戦ふといふことは、考へざるも甚しいものである。これは適々英米或はロシアの手に乗ることであつて、彼等は初めから日本が蔣介石に手を焼いて何年でも支那の泥沼に足を突込むことを望んでゐる、彼等が支那を助けるのはその爲であります。日本の國力を消耗させようとしてゐるのであります。さういふ第三國の註文にまんまと乗るのが十年戦争論である。無論蔣介石が飽くまでも大局に目覺めないで日本に抵抗するなら之が膺懲を續けることも必要でありますけれども、未だ曾て蔣介石に對して世界の大勢を説き、日本の眞意を示して大處高處から彼を諭した政治家のあるを聞かない。日本政府に於てもさういふ風に蔣介石に話しかけてゐないのであります。固より、さういふ理想論のみで支那の政治家が直ちに日本の言ふことを聞くとは思はれないが、一

方から見れば今日、日本が大東亞共榮圈を確立するといふ決意をした以上、支那人もこの政策に共鳴しなければならぬ關係にある。支那は御承知の通り人口は四億五千萬もある。從來支那といふ處は物資が豊富な處と考へられてゐるが、實際に於ては支那は人口に比べたならば非常な貧乏國である、自分達の食ふ物も足りない。恐らく物がなくて字義通り餓死する人間が年々何十萬もあると思ひます。この物の無い國から日本は物を取つて來ようといふことを考へてゐる。それが日本の經濟提携といふことの裏にあると支那人は感じたわけである。物を持たぬ彼等から日本が物を奪はうと考へるものだから、どうしても彼等は抵抗する、これは無理はない。經濟提携といふことが支那人から見れば一番不安である。日本と一緒にやつても支那の窮乏といふものは救はれない、殊に日本人は中々支那人を儲けさせない。イギリスやアメリカは兎も角金を持つて來る、さうして支那から物を持つて行くか知らぬが、支那人にやはり適當に儲けさせて呉れる。日本との提携は少しも得にならないが、英米とやれば得になるといふのが彼等の考へ方である。要するに日本が支那か

ら物を持つて來ようと考へてをる間は、日支のほんたうの提携は出來ない、日本の八紘一宇の大理想を實現することは出來ない。然るに今後我々の進出せんとする南方は世界一の豊穰なる地域である。從來白人が獨占してアジア人に利用せしめなかつたこの地方が、今や單に日本人のみならず、支那人の爲めにも開放されるといふことになれば、彼等の物の考へ方が一變する。今まで日本と一諸に行くことは損をすると考へたが、今度は日本と一緒にやつて、始めて支那自身が救はれることになるのであります。さうして南方は物が有り餘るから、日本は、もはや、いやなら支那の物は要らぬといふことも云ひ得るわけである。ここで日本と支那の關係が、始めてアジア的の立場に立つて解決出来る。南方進出、南方政策といふものが問題にならなかつた時代においては支那だけを睨み、日滿支だけを睨み、ここで日本と支那との問題を何とか諒解點に達しようとするから頗る困難であつた。併し大東亞といふ廣い地域に互つて問題を解決しようといふことになると、支那も日本と共に南進政策に乗出さうといふことになつて來る。この大局から支那に臨むならば支那事

變の解決は立所に出来る。若し支那の政治家が、彼等の面子或は感情から、日本との提携に應じないといふことであるならば、恐らく四億五千萬の支那人はそれこそ蔣介石を相手にしなくなるだらうと思ふ。

私が先程申しした通り、支那事變といふものは既に大體その目的を達したのである。考へ様によつては最早やこの上戦争の理由はなくなつてゐるといふことが言へると思ふのでありますが、併しそれは無論大東亞共榮圏を建設するといふ大前提に立つて言ふのである。今日大事な問題はアジアの獨立といふことであつて、アジア民族の解放といふことは單に支那だけの問題でなくなつてをります。從來は支那の新秩序を作るといふことが支那事變の目的であつた。然るに今日は東亞全體に亘つて新秩序の建設をやることになつた。之は支那だけに拘泥しては出來ない。我々は東亞全體として白人の勢力から獨立しようといふ、さういふ大きな政策に乗出したのである。さういふ際に同じ東亞の同胞である支那と日本が喧嘩して互に力を消耗してゐるといふことは、どう考へても私は間違つた行き方であると思ひます。勿論、日本の國力といふものは、日本人の多くが考へてをり又英米あたりが希望してをるやうな脆弱なものではない、支那事變をやりながらでも私は南方政策は十分可能であると思ふが、今申し上げたやうな根本の建前からいへば、支那事變は一日も早く解決することが望ましい、又それは出來ることであると思ひます。

今日、南方に對して國民の關心は最も深まつてをるのでありますが、之れは支那よりも更に問題は複雑である。東南アジアに對するヨーロッパ、アメリカ諸國の關心は更に痛切なものであります。日本としてはこれ等との關係を十分に考へなければならぬ。支那事變だけならば今日何處からも大した邪魔は入つて來ない。併し、更に一步南方に進むといふことになると、さういふ諸國の利害と痛切に衝突するといふことを覺悟しなければならぬ。フランスが既にああいふ無力な状態に陥つたから問題は専ら英米であります。この關係を少しく申上げてみたいと思ひます。

英米との關係といふことになれば、先づ第一に今日ドイツとイギリスの戦争がどういふ結末を告げるであらうかといふことから考へる必要がありますが、果してイギリスがドイツに負かされて、英帝國が解體するといふことになる、アジアにおけるイギリス植民地の解放は、容易になると一般に考へられてゐる。然らば英獨の戦争はどうなるか、その見透しはどうであらうかと云ひますと、私は實は英獨の戦争をさういふ風に簡單に見ることは出來ないと思つてをります。假りにイギリスがドイツに負けたとしましても、イギリスのアジアの植民地はさう簡單に、手取り早く日本の手によつて開放することが出來るとは言へないと思ふ。それといふのは、一般に戦争してゐるのはイギリスである、イギリスが世界の七つの海に跨がつて作つた帝國を最後まで守らんとしてゐると見るのでありますが、實際に於ては、この戦争はもう少し複雑な性質を持つてゐる。イギリス本土に住むところの四千八百萬

の國民が打つて一丸となつてドイツに對抗し、そして英本土は英帝國の心臓部であり生命であるから政府も國民も之を守る爲に最後の血の一滴までも注ぐといふ決意を固めてをるならば問題は稍々簡單であるけれども、實際は抑々この戦争を始めたのはイギリス國民ではないと私は思ふ。イギリスの政策を決定するのは少數の支配階級、特に最近イギリスの政治をやつてゐるのは大體ユダヤ財閥及び之と密接な關係を持つてゐる政治家であると云はれる。これ等の人々は決して英國民と一身同體ではない、彼等の親類はフランスにもある、彼等の本家は今日アメリカであります。かういふユダヤ財閥的の勢力、それと密接の關係に立つアングロ・サクソン及びアメリカの政治家、財閥といふものは國際的存在であります、國際財閥であります。決してイギリスだけのものではない、アメリカだけのものではない、フランスだけのものではない。これ等勢力の利害はドイツ、イタリアといふやうな、あの全體主義の行き方と全く對立してゐる。英佛と獨伊との戦争が一口にヒットラーとユダヤとの戦争であるといはれたのはその爲である。現にヨーロッパ方面におきましては

かういふ風にこの戦争を性格づけてをります。ドイツやイタリアの全體主義の行き方は國際財閥から見れば大敵であります。第一、金本位といふものを無視し國際資本の力に楯ついて立派に成功してゐる。ヒットラーに依つて全體主義の政治經濟が成功してドイツがヨーロッパに覇を唱へんとしてゐる、このまま放つて置くと容易ならぬことになる、双葉のうち刈取らねばならぬといふのがこの英獨戦争の根本であります。實はイギリスの民衆とは何等關係がない。無論政治家は言論機關を始め一切の國家機關社會設備を手中に握つてゐるのであるから、國民の愛國心を湧立たせ、敵愾心を煽つて來た。イギリスの民衆は誰も彼も自由のため、正義のため、國家獨立のためと言つて戦争してをるのでありますが、實際に於てイギリスの指導者等はさういふ崇高なる理想に基いてこの戦争を始めたとは云へないと思ふ。今日イギリスの支配階級といふものは最早や心は半分アメリカ大陸に行つてゐるのではあるまいか。彼等の最も大事なもののはアメリカに移つてをります。イギリスには恐らく金塊は最早やないだらうと云はれる。悉くアメリカに移してをる。さうである

から彼等は最後まであの島を守らうといふ精神でやつてゐるとは考へられない。出來る限り抵抗はするが、軍艦、商船は餘りなくなさないやうにして、最後には之を持つてオーストラリアとか、カナダに移るものと見なければならぬ。國民を擧げての戦争であるならば、あの島を見捨てて外に移るといふことは考へられない。軍艦が一艘でも残つてをれば飽までも本土を死守すべきであるが、イギリス帝國とは一つの株式會社で英本土は本店の所在地に過ぎないと極端に云ふ人もある位であります。本店は焼けても會社は他に移る許りだと云ふのです。であるから假りにドイツ軍がイギリス本土に上陸してもイギリスの支配階級は中々屈服しない、戦争はそれでお仕舞にならない。ドイツがどういふ作戦に出るか、果して上陸作戦をやるかどうか、豫斷は許さぬのでありますが、英本土を取つたと云つてそれだけでこの戦争がドイツの勝利として簡単に片付くものではないと思はれる。實は今日實際を言ふと、最早や戦争はアメリカが引取つてやつてゐるとも云へます。支那の後押しをして日本と戦はしてゐるやうに、アメリカはイギリスを助け之を鞭撻して戦争をやつ

てゐる。實は從來アメリカは英佛を頼みにして來た。フランスの陸軍、イギリスの海軍を當てにして自分は軍備を怠つてゐた。然るにそのフランスは倒れ、イギリスもどうやら危い。昨年フランスの敗北に續いて獨軍がイギリス本土上陸作戰をやつたらイギリスは危いと思はれた際、米國人がイギリスに言つたことは「そんな島などは棄てて軍艦を持つて早く逃げて來い」といふのであつた。これが彼等の本音であります。然るにその後イギリスが中々よく防戦する、この分では防ぎ終せるかも知れぬといふので今はイギリスに盛に武器を提供して「その島を守れ」と言つてゐる。ところがどうしても守り切れぬといふ情勢になつて來れば、又島を棄てて逃げて來いと言ふに違ひない。今日はまだアメリカは十分なる兵力を備へてをらないから、イギリスが折角あの第一線を守つてゐる間に、全力を擧げて出來るだけ早く軍備を備へなければならぬといふことで、あの厯大な豫算を矢繼ぎ早々に計上してゐるわけであつて、イギリスを一日も長く戦はせるだけの援助はしなければならぬ。併し乍ら若しイギリスが負けるに決つてをるならば、その援助は一切を注ぎ込むこ

とは危険であるといふので、今日は新しく出來る武器を英米半分半分にしよと言つて居る。本來なら出來るだけ武器をやつて、イギリスを飽までも抵抗をさせるのがいいのであるが、負けた場合には大變である。イギリスも助け、自分も軍備をやるといふわけで、でんでこ舞ひをしてゐる。愈々敗戦となれば、軍艦だけは早く持つて逃げるやう、イギリスとアメリカの間には、とうに話合があるだらうと思ふ。如何なる場合においても之を自沈するとかドイツに捕獲させることはせぬといふ約束はあるだらうと思ふ。

さういふ風に見ると實は日本から見ても、イギリスの方の戦争が直ぐ片付けばいいのか悪いのか分らぬ。あの英本土を守れる望のある間はイギリスは全力を集中して戦ふ、従つて海軍も全部島の周圍に集中して戦ふ。一度あの島保つべからずとなると軍艦を持つて逃げてしまふ。さうしてヨーロッパを失ふといふことになるユダヤ人及び英米の國際財閥から見て、アジアの植民地、アジアにおけるイギリスの植民地が非常に大事になつて來る。ヨーロッパを閉出されて、その上アジアからも閉

出されることになれば従來の彼等の國際主義は立つて行かなくなる。折角集めた金
 が用をなさなくなる。これはアングロ・サクソン、アメリカ及びユダヤの資本主義
 から見ると重大な問題であつて、ヨーロッパを失ふといふことになる、せめてア
 ジアは手中に残さねばならない、愈々ここに力を集中しなければならぬ。日本から
 見て迷惑至極であるが不可避なる勢である。日本では早く英本土をやつてしまへと
 鶴首して待つてゐる人もあるが、問題はさう簡單ではない。併し乍ら英本土は決し
 て永久に保てるものではない。遅くも八、九月頃までには、保てなくなつてしまふ
 でせう。その時は日本は太平洋に於てアメリカの海軍に加ふるにイギリスの海軍の
 大部分を向ふに廻さなければならぬこととなる。ドイツとイタリアが日本と共同戦
 線を張つてゐるから英米も大西洋をがら明きには出来まいが、英本土没落と同時に
 海軍力の關係は日本の不利になるといふことを覺悟しなければならぬ。

*

さうであるならば、日本が南方進出をやるといふことならば何時がその時機であ
 るかといふことは小學校の子供でも分ることである。英米の勢力が合體し、十分な
 る備へをしてしまつてからでは手後れであらう。日本が意を決して南方進出をやる、
 アジアの解放をやるといふことであるならば、この所數箇月、英本土が守を失はぬ
 うち、イギリスの海軍の手のすかぬうち、南方の備への十分出来ないうちに日本は
 手を打つべきであります。併し一度南方に出た後、英米合同の海軍でやられたら
 日本は參つてしまふだらうといふ議論が出るわけであります。無論日本として決し
 て樂觀を許さぬのであります。併し私は軍事は素人であるが、逸を以て勞を待つと
 いふ姿勢をとれば、日本の立場は非常に有利になる。海軍力を比較すれば、今日イ
 ギリスとドイツとでは問題にならぬ程イギリスが優勢である。そのイギリスの海軍
 が今日は手も足も出ない。彼のノルウェーの作戦は、イギリスもドイツも同時にや
 つた。唯一足先にドイツの方は空軍の基地を作つたから、イギリスは散々やられた。
 今日の戦争において先に基地を持つといふことが如何に重要であるかはこの一事を

以て見れば分る。それでは日本が歐羅巴戦争のまだ鎮まらぬうちに、イギリスが全力を擧げて英本土を守つてをるうちに南方に出たならば、アメリカは何う出るかといふことが問題であります。無論アメリカが來ぬといふことは誰も保證し得ない。

併し乍らアメリカの今日の立場は先程も大體申上げたが、何といつても軍備が足りない、太平洋と大西洋の両面作戦をやるには足りない。海軍も空軍も不充分である、陸軍の如きは勿論まだ出來てゐない。これが彼等から見て安心が行くといふ迄には中々二年も三年もかかる。日本が南方に行つたといふのでアメリカが直ぐ押寄せて來る、武力戦を挑んで來るといふことならば今彼等が今日イギリスに送つてゐる武器は止めなくてはならぬ、イギリス援助はよさなければならぬ。のみならず大童になつて今造つてゐる武器も、日本との戦争になれば右から左に使はなければならぬといふことになつて、イギリス敗戦の後、獨伊に對する關係に於てアメリカの立場は危険になる。持つてゐる海軍も大分失はなければならぬのであるからアメリカとしても到底この手は打ちにくい。彼等のドイツに對する恐怖は今日まだ消え去

らない。日本との戦争において、現に持つてゐる海軍をなくなしてしまふといふことは到底出來ないことである。唯、經濟的に日本に對する壓迫は勿論、或は名目上戦争關係に入ることとも考へられぬことはないが、併しそれも容易ではない。日本に對して宣戦布告をすることは同時に獨伊との戦争になる。さうすると、イギリスの潰れた後、日獨伊三國を向ふに廻してアメリカは今後長期に亙る戦争を覺悟しなければならぬ。アメリカの國家社會は平穩無事の時は強いやうでも、實はその間に大いなる弱點を藏してゐる。日獨伊のやうな強國を向ふに廻して戦争するといふことが果して出來るものか。大多數の國民は勿論反對であるが、ユダヤ的な金權寡頭政治の血迷うた判断から國民を引摺つて戦争をやらぬとも限らない。さうなればアメリカは國內大混亂に陥つて破綻百出するだらうと思ふ。それはこの間の不景氣時代にアメリカを通つて見て痛感したのですが、あの當時アメリカ國民はその政治形體、國家組織に對する信念をすつかり失つて、社會革命の前夜を思はせた。私は無暗に大膽な行動をとれとは言はぬが、日本は唯アメリカの物の豊富なることを以て恐れを

なしてゐる。金塊を何百億積んだところで、金では戦争は出来ない。人口はアメリカは一億三千万、日獨伊合したら恐らく二億もあるでせう。最後に物を言ふのは人間である。一億三千万のアメリカ人の中で黒人は二千万人から三千万もあるかも知れぬ。黒人の統計は非常に小さく擧げて、人口の一割一千三百萬と言つてをります。ドイツ系のアメリカ人が、實際において二千萬から三千万と云はれてをります。ドイツ系のアメリカ人が二千二百萬、イタリア人、アイルランド人も澤山居る。その外、中央ヨーロッパから行つた移民、之等は決して悉くアングロ・サクソン系ユダヤ系の政治に満足してゐるのではない。一度戦争となれば、さういふやうなことから色々弱點が出て来る。アメリカの立場といふものはさういふものであるから、私の見る所では、恐らく日本が敢然起つたならば何もし切らぬだらうと思ふ。随分、色々日本を恫喝して來てをります。恫喝が效く間はいくらでも恫喝する。

併し乍ら彼等の一番心配してゐるのは日本は「腹切り」をやる國民である、日本は支那事變で非常に疲弊してゐる、色々弱點があるから戦争は出来ない筈だが、何

しろいさとなると腹を切るから恐いと考へてゐる。この間、外務大臣が議會で強いことを言つたのは餘程利いたやうだ。併し日本が南進を決行するとしても、それは決して「腹切り」ではないのは勿論です。實際に於て彼等が考へる程、日本の力は決して弱つてゐない。若しアメリカを向ふに廻して戦ふといふことになつたならば、それこそ國民の緊張は今日のやうなものでない。今我々が夢想もしないやうな絶大な力が現はれて來ると思ひます。兎も角、アメリカは、日本に優勢な海軍があり、又腹切りの出来る國民であるから、之にほんとに來られては今非常に困るといふので、表面は強い事を言つてゐるが、どうかして日本が起たないやうにと百方苦心してゐる。この前の戦争でアメリカが愈々聯合國側に加擔するといふ決意をした時、日本に對してくすぐつたい位の御世辭を使つたものである。私は當時大使館の書記官としてワシントンに居つたのであるが、所謂石井ランシング協定を日本に許して、滿洲に對する日本の特殊地位を認めた。日本の戦時使節を下にも置かず、到る處王者の如くに歓迎した。あの時ドイツは將に負けかかつてをり、日本はイギリスの同

盟國として一緒に戦つてをるにも拘らず、萬一背後を衝かれることを恐れて愈々彼等が戦争に入る前に日本に對してそれだけの手を盡してゐる。

今日、日本は獨伊と同盟して居り、而もドイツの勢は隆々として、あの當時とは非常に違つてゐる。アメリカが参戦した時とは、今日一般の情勢が問題にならぬほど違つてゐる。あの當時のアメリカを記憶する私は今日のアメリカはどうしても戦争に入らぬだらうと考へざるを得ない。尤もあの時のアメリカは今日のやうに所謂金權寡頭政治ではなかつた。ユダヤ人の力が伸びて來たのは、この前の歐洲戦争の結果である。彼等がむりやり戦争に持つて行かぬとは限らぬのでありますが、再軍備が完成せず、従つて勝算のない戦争に、アメリカが入るとはなかなか考へにくい。又假りに戦争になつても日本は決して心配は要らないと私は考へるのであります。勿論南方に進出すれば、多分英米と今後長きに亘つての戦争を覺悟しなければならぬことは申すまでもない。そのためには先程申し通り陸上に於て支那事變を早く片付けロシアとの關係も調整し、一切の手を盡し、萬全の姿勢を整へなければなり

ませぬ。併しながらさういふことが總て安心出來ないと南方に出られないといふことだと時機を逸する虞れのあることも記憶しなければならぬ。南方に出ると同時に、さういふ陸上の解決も不可能でない。此際は唯だ大事をとつてゐるといふことでは相成らぬと私は思ふのであります。この戦争の後には世界の新しい秩序が打立てられて、日獨伊がその指導的役割を擔當するといふ實に重大なる時機に際會してをるのでありますから、我々も平生の心構へでなく、總て考へを飛躍させなければなりません。それこそ英雄的時代であるから、國民の一人一人が何れも英雄にならなければならぬと考へます。

(皇紀二千六百年二月十三日杉浦先生追慕講演會講演、「大日」三月號所載)

編輯の後に

時局の重大さは云ふに及ばない。

この際、今、切に要望されるのは、亂雲を断ち切る明光である。眼前の困難に惑亂されて溷濁し、狼狽した對策ではなく、世界史の必然を把握し、大局的判斷を失せず、適切に即應し得る抜本的斷案である。それは正しき思想と明察と著眼との具有でなければならぬ。況んや清算さるべき謬想に根を置いた誤導では勿論ない。白鳥敏夫氏はかかる見地から見ても顯著なる存在であるばかりでなく、既に十年の久しき、言・行ともにその信念を以て貫いて來てゐる。さうして私は今日日本が要求してゐるものがこの人の持つものであることを信じて疑はない。進んで稿を乞ひ編に當つた所以である。量こそ十分ではないが、讀者は本書の行間から大きな示唆

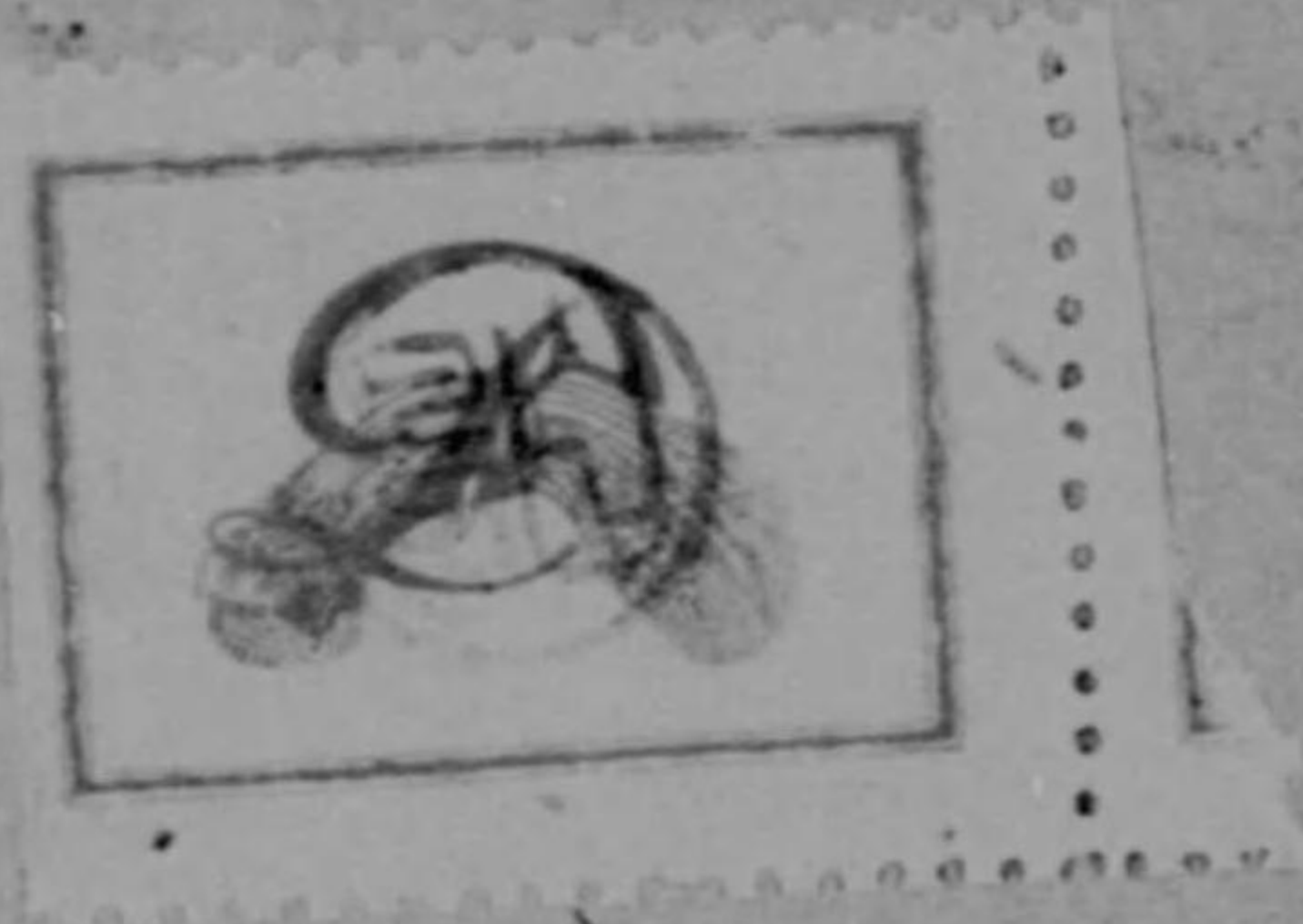
を酌み取るであらうことを信ずる。

本書は、氏の舊冬以降に於ける講演中の最も重要なものを経とし、珍らしく自ら執筆した數篇を緯として輯めた。従つて論旨を首尾一貫せしめることに留意したが、多少の遺漏と重複とを免れないのは已むを得なかつた。尙、後篇には氏の思想の一端に觸れたものを舊著から數篇再輯した。

三島 康夫

皇紀二千六百一年三月二十日

戦ひの時代の代



昭和十六年四月五日印刷
昭和十六年四月十日初刷三萬部發行

◎定價七十八錢

著者 白鳥敏夫

刊行者 東京市麹町區三番町一
長谷川巳之吉

刊行所 東京市麹町區三番町一
第一書房
振替東京六四二二三
電話九段一四一五
三三四四

東京銀座數寄屋橋

發兌 第一書房

電話京橋五九八七番

外地定價八十五錢

但、土地の事情に依り
何割増することあるべし。

●落丁・亂丁の際は直接本社にてお取替へ致します。
●出版物に関するお問合せと御注文は營業部宛にお願いします。

印刷者 東京市小石川久堅町 共同印刷株式會社

戰時體制版の宣言

第一書房 長谷川巳之吉

此度計らずも杉浦重剛先生の「選集倫理御進講草案」を戰時體制版として刊行するの光榮を擔ふに當り、いささか戰時體制版發行の趣旨・抱負を宣言いたします。

凡そ出版の事業たる一國文化のバロメータを成すは言ふまでもありませんが、特に現下の如き戰時下の非常時局に當つては、その責務益々重大なるを自覺し、茲に物資經濟の根幹を成す用紙統制に則ると共に、大局からの國策に順應する新日本文化の創造に進んで協力寄與すべき決意愈々固きを信じてやまない次第です。私は第一書房設立以來十五年、一意或る理想をもつて出版を續けて來たのでありますが、特に今日に於いて一層、良書出版の意義とその必要の大なるを思ひ、出版報國を第一義とする戰時體制版の刊行に邁進するに至つたのであります。

現代日本の出版界はその量に於いて、又種類に於いて世界の出版國の一つであると言はれて居りますが、その質に於いては異して何うでありませうか、名を大衆にかりる俗悪趣味横溢の娛樂雜誌や婦人讀みもの類の跳梁跋扈は、どう最眞目に見ても一國文化の伸長にプラスするものとは考へられないのであります。惟ふに大衆化とは徒らに大衆に阿ねる事ではなくして、實に名著をもつて大衆を引き上げる事ではなくてはならないと信じます。それ故に、私は此の戰時體制版を引提げて敢然と之れに對處しようとしたのであります。従つて本體制版はその點・特に留意して、今日及び今日以後の日本人が、日本人として起つ上には是非とも必要な萬人必讀の書を、精神の糧として供給することをもつて使命とするものであります。

斯くして自然・本戰時體制版は、思想・藝術・宗教等の文化の各方面に涉つて、古今東西を通じて現代日本に最も緊要にして重大意義ある名著のみの普及を計るものであります。

今や史上未曾有の重大時機に際會してゐる私達は、國をあげて長期建設に邁進して居ります。而も戦後と雖もなほ國力總動員を要し、所謂「常在戰場」の氣力が飽くまで必要であることは言ふまでもなく、私が聲を大にして本シリーズを戰時體制版と呼號するのも此の意味に外ならないのであります。我々は更らに前線銃後を打つて一體に結び、これをもつて事變中の用意修養に資し、戦後の準備を怠らず、日本人としての確乎たる脊骨と肚とを養つて新日本文化の建設に資し、進んでは來るべき東洋文化ルネッサンスの分擔者たるの實をあげたいと念じてやまない者であります。茲に微意を披瀝して天下幾百萬讀書子の聲援を冀ひ、熱意ある支持を衷心より希望してやみません。(昭和十三年九月)

第一書房戰時體制版

杉浦重剛謹撰
選集 倫理御進講草案

文學博士 佐佐木信綱謹著
明治天皇御集謹解 近刊

法學博士 大川周明著
新訂 日本二千六百年史

文學博士 後藤末雄著
支那四千年史

小泉八雲著 戸川秋骨譯
神國日本 新訂版

室伏高信譯
ヒットラア 我が闘争

外務省顧問 白鳥敏夫著
戦ひの時代

本書は杉浦先生が生前著した御進講草案の集大成にして、生活思想の基礎となすべき精神の糧である。

我が日本の偉烈な世界に赫灼たる心と御製する御精神の至寶。佐々木博士が皇御製の大御心を御進講の御精神を謹述すると共に、烈々日本精神の源泉を衝いた萬民必讀不朽の書である。

建國二千六百年を迎へて、我が國體の莊嚴も平易なる劃期的日本史に善處すべき偉大な國民必讀の國史讀本であり、國民讀本である。

興亡變遷の歴史は、また東洋苦節の足跡である。支那の歴史は、また東洋苦節の足跡である。支那の歴史は、また東洋苦節の足跡である。

アメリカ海軍の當局は、本書を以つて世界屈指の日本研究の必讀書となし、海軍將校以上には必ず命令を以つて讀ませるものと云はれて、他にその西敵を見ない好個の文獻である。

刊行以來五百万部を突破。これヒットラア總統の政治的思想の血肉の書であり、情熱と榮光の自傳として大衆の心を追つて要約し、この劃期的著述の全貌を明らかにした。

現代は正に戦ひの時代である。今や我々に最も切望せらるるものは、正に戦ひの時代である。今や我々に最も切望せらるるものは、正に戦ひの時代である。

法學博士 下村海南著
來るべき日本

陸軍中將 香椎浩平著
英雄日本民族の自覺

經濟學博士 高木友三郎著
新體制の經濟

川田 順著
吉野朝の悲歌

川田 順著
幕末愛國歌 文部省推薦

陶山 務著
吉田松陰の精神 近刊

文學博士 高楠順次郎著
佛教の眞髓

下村博士の該博な知識、豊富な體驗、明敏な時代への洞察。これから東亞の驚愕の書、好個の社會讀本である。

日本民族の優秀純粋性を科學的に論究し、東西古今の英雄を比較検討し、その本質的相違を明らかにした。劃期的研究である。

革新の鐘は世界に鳴る。人類はいま新たな世界觀と人生觀とを以つて新たる世界を創造し立ち上らんとする。經濟もまた新たる世界の權威が放つ世界新體制經濟の第一聲だ。

(京大文學部助教授中村直勝氏評) 最初に私が感じたことは、私一人だけで拜讀するのが勿體ないと思つたことである。

節操なくまで高く熱情の如き幕末愛國歌。人々はこの中に既に新東亞建設の大理想が含まれてゐることを發見して、感激を禁じ得ないで貴重なる寄與と云ふべきである。銃後文學へのまことに貴重なる寄與と云ふべきである。

本書は明治維新の大業を完遂せしめた大精神の源泉と云ふべき。吉田松陰の意義を語り、好個の日本精神の眞核を説いたもの、更にその歴史的意義を語り、好個の日本精神の眞核を説いたもの、更にその歴史的意義を語り、好個の日本精神の眞核を説いたもの。

日本佛敎界に高楠博士が印した足跡は、まことに大き。何人も佛敎の根本精神を容易に把握せしむべく編まれた。

第一書房戰時體制版

各冊四六判 定價七十八錢

高神覺昇著 佛典 般若心經講義

高神覺昇著

日本精神と佛教

山田靈林著 禪學讀本

土田杏村著

人生論・宗教論・人間論

陶山務譯述

テュラント 哲學夜話

木村 毅編 支那紀行

弓館芳夫譯 西遊記

弓館芳夫譯 水滸傳

新居 格譯

パール・バック 大地 第一部

新居 格譯

パール・バック 大地 第二部

新居 格譯

パール・バック 大地 第三部

レイモント 新居格譯

レイモント 民 第一部 秋の巻

レイモント 阿部知二譯

レイモント 民 第二部 冬の巻

レイモント 伊藤整譯

レイモント 民 第三部 春の巻

J. O. A. K. より放送して一躍天下を風靡した般若心經の名講義。本書の出現によつて全新聞雑誌が一斉に宗教運動に改訂を加へ、新たに「般若心經を語る」の一節を加へた。改訂

本書は日本佛教界にその深き學殖と體識を語はれつゝある著者が、この時代の要望に應へるべき筆を執れるもの。佛國の精神に基いて日本佛教の眞精神を説き、日本文化と佛教の關係を述べ、其の世界的使命を宣揚せる力著。

未だ禪に就いてならんやと云ふところなき人も、この書によつて一讀、禪の關門を通り、人生の奥義に徹するであらう。人生の思案に豊かなる人は、その體験を深めるであらう。

「人生論」「宗教論」「人間論」は一聯の姉妹篇で、土田氏の思想的思索の深さと廣さと、その圓熟と透徹性を示す代表的著作であり、人生を語り、宗教を論じ、人間の意義を正しく把握せんとする者にとつて無二の指導書である。

恐らくこれほど愉しく讀める哲學書はあつてまい。本國のアメリカでは未だに年々十數萬部の賣れ行きを見せ、つて初め、眞に劃期的なものとなつたといふことが出来る。

これは現文壇、詩壇、畫壇の大家新銳三十餘氏の代表的支那紀行文集である。個性豊かな文により、繪により支那全土の各都市、名所、舊蹟の風物をうつつして、剩すところなき名紀行文集、また絶好の大陸旅行ハンド・ブックである。

世界文學の中で餘りにも有名であり、古來幾多の類書が出たが、本書は最も適切に原文の興味を傳へ、譯文流麗にして、眞に機智に富んでゐる。奇想天外の孫悟空の活躍こそ、この名譯によつて初めて巻をおく能はざらぬ。

支那が生んだ世界的奇書『水滸傳』の清新瀟灑たる現代語譯。數多の英雄が驚天動地の活躍する、讀末を敘述して盡きるところを知らぬに、壯絶快絶の文字は、讀者を思はせ、快哉を叫ばしめずには措かない。正に支那民族性の大繪巻。

支那を描いて世界的榮譽ノール賞を授けられたパール夫人の傑作！これを讀まなければ支那の眞相は解らない。内亂と飢饉とを繰返す支那四千年の苦惱を身をもつて、貫き一介の農民が巨萬の富を成すに到る現實を描破する。

『大地』の主人公が死んで三人の息子達の代となる。地主と軍人と商人に成つた息子は、どの軍閥と財閥の成長とそとゆくか。バック夫人は近代支那の軍閥と財閥の成長とそ

『大地』は更に三代目に進む。『大地』から生れ出た一家が、最後に現代文明に蠶食されて分裂する。米國留學から歸つた青年が東文化の垂離に如何に悩むか。彼等に果して黎明が来るか。現代支那知識人の徹底的な解剖。

ノール賞を受けた波蘭農文學の巨作。自然と人間との密接な關係を細微に描破して示唆多きもの。本書の如きは稀れである。今や農文學が世紀の課題となりつつあるとき、それに應へるものは正にこの巨篇『農民』である。

『農民』は自然を眞に生命ある存在として描くことに於いてハアデイ、メレデイ、スに比較され、而もその雄大に於いて農村的構想は、批判家をし、レイモントこそは、ポオラン

作者の逞しい筆で描き上げられた農民たちは、いづれも古代人のやうな眞直な感情と行爲とをもち、懷疑や宗教的意識等がそれだけの場面には、生活力、野性、愛欲、宗教的

2288

第一書房戰時體制版

レイモント 新居格譯 農 民 第四部 夏の巻

國木田獨歩 傑作選集 運命論者

大田黒元雄著 新洋樂夜話

大田黒元雄著 レコード音楽案内

田部重治著 山と溪谷

前大蔵省事務官 片岡政一著 戦時下に於ける 國民の税法

新居格編 支那在留日 本人小學生 綴方現地報告

今やポオランドの名は、世界の地圖から消えんとする。然しレイモントの名は、この不朽の大作『農民』によつて、未來と藝術の永遠性のなかに輝かしい光彩を放つてあらう。

眞摯な人生探求者、眞理と美と愛の氣高い殉教者國木田獨歩の代表的傑作「武蔵野」一運命論者」を始めて、酒中日記の「馬場の友」等十九篇の名作を一巻に盛つたもので、獨歩の傑作は悉くここに選集されたこと云ひ得る。

從來の『洋樂夜話』を現代の事情に適應せしむるべく、最近の嶄新な資料により、今日の觀點から、根本的に約三倍の分量に書き改めたもの。音樂批評家として定評ある著者の該博な知識はこの書の隅々にまで充ち溢れてゐる。

あらゆる類書と全く選を異にする編輯方法により、洋樂レコードの鳥瞰圖であると同時に、すべて文化人に缺くべからざるよき音樂旅行案内ならしめることを目的とせる大著。この著者にして始めてなした劃期的著述である。

詩人の眼を以つて、哲人の心を以つて、しかも周到な用意をもつてなされた、山旅の父なる著者二十年の山旅の記録であり、尊敬すべきヒュイマン・ド・キユメントである。山を愛する人、山を憧れる人たちのバイブルである。

今や税の知識は戦時下國民に絶對不可缺のものとなつた。我々は最早稅務署の強制によつて税を負担するのではなく、自ら税を計算し、把握し、銃後國民の責務を果されよ。依つてその眞髓を把握し、銃後國民の責務を果されよ。

これは大陸にすくすくと延びゆく第二の國民の赤裸なる生活の姿であり、また我等が小さき同胞の眞實な眼に映じ、心によつて捉へられた尊い聖戰の現地報告である。大人にも、子供にも、等しく貴重な生きる記録である。

